

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.224

2012年1月

平成24年 濱口総長年頭あいさつ「新年を迎えて」



目次

●年頭あいさつ	
平成24年 新年を迎えて	3
●ニュース	
本学若手研究者が中川文部科学大臣へ提言を提出	8
ルース駐日米国大使が来学し、学生と対話	8
濱口総長がグダニスク医科大学から名誉博士号を授与される	9
濱口総長による講演会「創基140周年を迎えて―名古屋大学の源流をたどる―」を開催	9
グローバル30日本留学フェア2011を開催	10
中国語スピーチコンテスト「江蘇杯」を開催	10
田中靖郎特別教授が日本学士院新会員として選定される	11
平成23年度博士課程教育リーディングプログラムに採択される	11
平成23年度永年勤続者表彰式を開催	12
若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを開催	12
東海地域の課題を考える産官学懇談会を開催	13
「プロフェッショナル仕事の流儀 in 名古屋大学」を開催	13
下駄の鼻緒奨学金の授与式を挙げる	14
年末キャンパスクリーンを実施	14
第75回防災アカデミーを開催	15
●知の先端	
フロリゲンの多様な機能	16
木下 俊則（大学院理学研究科教授）	
●知の未来へ	
危険は無限、資源は有限―エビデンスから学校の安全を考える	18
内田 良（大学院教育発達科学研究科准教授）	
●学生の元気	
平成23年度名古屋大学体育会会長表彰 表彰式	19
●部局ニュース	
第13回名古屋ビジネスセミナーを開催	20
理農館の看板上掲式を挙げる	20
環境学研究科創設10周年記念行事を開催	21
エコトピア科学に関する国際シンポジウム2011を開催	21
第11回遺伝子実験施設公開セミナーを開催	22
第13回国際研究集会を開催	22
第3回グローバル COE 国際シンポジウムを開催	23
古楽研究会第31回定期演奏会を開催	23
第21回企画展「ミクロの美術館 顕微鏡で見た人体の世界」を開催	24
ICCAE 2011年度第7回オープンセミナーを開催	25
ICCAE 2011年度第8回オープンセミナーを開催	25
●受賞者一覧	26
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年11月16日～12月15日	29
●イベントカレンダー	33
●ちょっと名大史	
明治天皇に拝謁した外国人教師ローレツ	36

平成24年 新年を迎えて ―歴史とは未来へのメッセージ―





名古屋大学

総長 濱口 道成

謹んで新年のお慶びを申し上げます。名古屋大学全学同窓会の皆様、教職員の皆様、大学院生・学部生の皆様、そして名古屋大学をご支援いただいた多くの皆様、日本各地で、そして世界の各地で、良い年を迎えられたことと、心よりお慶び申し上げます。今年が、皆様にとって明るく実りの多い年となる事を、お祈りいたします。

昨年、日本は東日本大震災という未曾有の災害を体験し、新年を迎えても、多くの方が未だ厳しい生活を強いられています。年の初めにあたり、被災地の一刻も早い復興を、心より祈念いたします。昨年は、震災に加えて、長期にわたる円高と、タイに発生した水害により、中部日本の産業も厳しい局面に直面しております。他方、年々厳しくなる財政状況と超高齢・人口減少社会の影響を受け、大

学の運営も予断を許さない緊張が続いております。新年度も、例年に増して厳しい展開が予想されますが、この困難な時にこそ、日本の真価が現れると信じております。新年を迎え、全学同窓会の皆様には、今年も変わらぬご指導ご鞭撻を頂けますよう、お願い申し上げます。

今、日本は、明治期、戦後の復興期に次ぐ第3の転換期にあると言えます。今我々の眼前にある課題を解決する道はあるのかと自問する時、私は明治、戦後の歴史の中で、当時の日本人がどう生きたか、そして名古屋大学は創基140周年を経てどう形作られてきたか、に思いを向けます。名大名誉教授佐々木雄太先生は「歴史とは未来へのメッセージ」であると述べておられます。先生の言葉にあるように、未来の可能性のヒントは、歴史の中にあリま



大震災追悼 減災連携研究センターシンポジウム「大震災、これから何をすべきか」

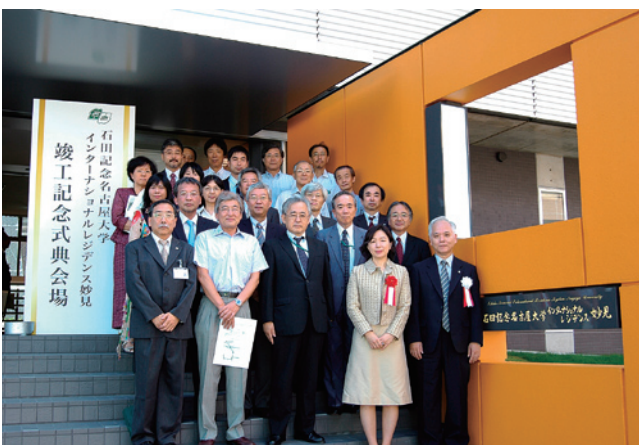


震災関連シンポジウム「東日本大震災から学ぶ」



平成23年度秋季入学式

す。明治、戦後の両時期に、日本が困難を越えて発展できた陰には、2つの共通する要因があります。それはまず、日本には世界でもまれな高い高等教育の水準と市民の倫理観があった事、そして発展の主体が若い世代によって担われた事です。この点で、私たち名古屋大学は、今改めて、若い世代に将来の希望と展望を与える大学教育とは何か、我々は「論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人」を育てているのかと問いなおす必要があると考えます。総長就任時に、大学運営の基本方針となる「瀆口プラン」をまとめましたが、私どもの目標は「名古屋大学



「石田記念名古屋大学インターナショナルレジデンス妙見」竣工記念式典



中川文部科学大臣が本学を視察し下村特別教授と懇談

から Nagoya University へ」、名古屋大学のグローバル化にあります。明治の時代に若者が描いた「坂の上の雲」、戦後の若者に限りない解放感を与えた「民主主義」に代わる現代の若者へのメッセージとして、「名古屋大学から Nagoya University へ」を掲げていきたいと考えています。

昨年は、名古屋大学のグローバル化を図る上で、大きな転機となる年でありました。10月より、文部科学省のグローバル30プログラムが本格的にスタートしました。このプログラムは、秋入学ですべての授業と大学のサービスを英語で提供する学部プログラムです。震災後にもかかわらず、UCLA レベルの入学者40名余りを迎える事が出来ました。学生の中には国連親善大使として、COP10開催の際豊田講堂でスピーチをした方もいらっしゃいます。世界各国から集まれた皆さんは、個性的で高い志を持っている青年です。10月には、我々のプログラムが、全国でも最も先進的な取り組みとして認められ、中川文部科学大臣の視察を受けました。今年度のG30入学生とも懇談を行い、我々の取り組みに対して、高い評価をいただきました。またその際、ノーベル賞学者の下村 脩先生を交え、



ルース駐日米国大使が来学し、学生と対話

名古屋大学独自の若手研究者育成事業（Young Leaders Cultivation）で採用した若手研究者と歓談していただきましたが、科学技術政策に対して、彼らから様々な要望がありました。大臣より、要望書をまとめるよう求められ、11月29日にお届けし、若手研究者が中川大臣と歓談する機会をいただきました。厳しい財政状況ではありますが、若手研究者の改革に対する真摯な思いを、聞いていただけたと思います。

「勇気ある知識人の育成」を掲げてはいるが、今の「名大生は、実直、堅実だが大人しい」と、折に触れ指摘を受けております。しかし私の眼には、最近少し変化が生まれているように思います。11月25日に米国ルース大使を迎え、学内で英語の討論会を開く事が出来ました。内心、人が集まるか、質問が出るかと危惧しておりましたが、これらは全て杞憂に終わりました。160名余りの元気な名大生が集まり、TPPを始め多くの課題について、英語で活発な意見交換ができました。ルース大使も大変喜んでおられ、学生の熱気の中で、一緒に写真を撮っておられました。11月19日には、NHKの協力を得て、名大院生のインター



中国語スピーチコンテスト「江蘇杯」

ンシップ企画による「プロフェッショナル仕事の流儀 in 名古屋」を開催しました。この会でも学生の熱い討論が繰り広げられ、教室の講義では見受けられない、彼らの本当の姿を見た思いがしました。一昨年より、上海の同済大学の協力を得て、名大上海事務所の尽力のもと、夏季中国語研修を開いています。初回は17名派遣しましたが、昨年は希望者が増え40名となりました。帰国後の報告会で彼らの成果と感動を聞く機会を持つてましたが、彼らのキラキラ輝く瞳を見ていると、体験の素晴らしさを共有します。実は参加者の4割程度にとって、この研修が自宅を離れて長期間生活した初めての体験だったそうです。私は、個人的にこの語学研修を「初めの一歩計画」と呼んでいます。自宅生の多い名大生に、勇気を持って外国へ出る最初の一歩を促す計画です。

ところで、中国語研修帰国後の報告会でこんな事がありました。私が学生たちに「来年もこの研修を継続したい。については、後輩の為に、君達の眼で見たマニュアルを作ってくれないか」と頼んだところ、即座にある学生の指摘を受けました。「研修の意味は、自分の力で困難を克服していくところにある。マニュアルを作ったら、勉強にならな



豊田講堂



登録有形文化財のプレート

い」と。私は、学生に高等教育の在り方を教えられた思いがしました。

昨年は、語学研修の成果を受け、12月10日に江蘇国際文化交流センター・南京大学主催の中国語スピーチコンテストを名大で開催しました。驚く事に、40名を超える参加希望者があり、学生の意欲と、彼らの音楽の様に美しい中国語に驚きました。ちなみに、中国語研修に参加した名大生に、参加理由を聞いたところ、入学式で総長が外国へ行けと言ったからだと言えが返ってきました。言葉の重さと、若者の率直さを改めて実感しました。ともあれ昨年は、実に多くの意欲的な名大生に会う事が出来た一年でした。

さて昨年、豊田講堂は創立50周年を迎えました。昨年7月、「日本のモダニズム建築の代表」として、有形文化財指定を受けました。日々、朝夕に眺める豊田講堂の姿は、50年を経たとは思えないモダンな姿を、刻々と変わる季節の中で見せています。勝沼精蔵元学長の意思と横 文彦先生の非凡な才能を具現化したものであり、また50年前の名大に満ちていた機運を具象化したものと、私は実感いたします。豊田講堂の有形文化財登録を記念して、1月12日午

後1時30分より、豊田講堂で記念の講演会を開催する予定です。同窓会の皆様のご参加をお願いいたします。さて、横先生のお話によれば、豊田講堂は、門のない名大にとって象徴的な門の形を持っているとのこと。科学と市民生活を結ぶ門、名古屋大学と名古屋市をつなぐ門を象徴しているのでしょうか。豊田講堂を含む名古屋大学のキャンパス設計を俯瞰的に見つめると、50年前の東山キャンパス造成時の設計思想が、深い意味をもたらしているように思います。門も塀もない大学として、また緑の深いキャンパスとして、研究者の活動を支えてきたキャンパスが、自由闊達な学風を生み、多くの革新的な研究成果を産み出したのではないのでしょうか。名大のキャンパスが生み出す空間が、学部を超えて進む研究協力を育み、昨年のキャンパスアジアやリーディング大学院で多数のプロジェクト採択をもたらしたとも思います。また緑の多い空間に育まれた環境に配慮する大学運営は、今年度「エコキャンパス日本一」と評価される成果をもたらしました。

さて、昨年1年間の出来事で、私の最も嬉しく思ったことに、赤崎 勇特別教授のエジソンメダルの受賞と、文化



ES 総合館

勲章の受章があります。あらためてご紹介するまでもなく、赤崎先生は、青色発光ダイオードの発明をされた方です。先生の発明をめぐって、夢想する事があります。もし、先生の発明がなかったら、現代の人類社会はどんな世界となっていた事かと。多分、携帯電話やパソコンはできなかったでしょう。Google も Yahoo も無かったでしょうし、S. ジョブズの才能も爆発する事はなかったでしょう。また、もし先生の発明がなかったら、LED による照明は生まれなかった事でしょう。昨年、工学部と理学部の共同の建築による ES 総合館を建てました。この ES 総合館は、巨大な建物では初めて、全館 LED 照明を採用しましたが、電気使用量が驚くほど少なく済んでいます。昨年夏以来、震災の影響を受け、電力不足が危惧されていますが、改めて LED 照明の素晴らしさを実感しています。赤崎先生が研究を始められたころ、だれも発熱のない固体により、照明が得られるとは思ってもいなかった事でしょう。半世紀経って、ようやく時代が先生の考えに追いついてきたとも言えます。更に、私は、赤崎先生と言う高潔で真っ直ぐな人格を持っておられる方が、このように人類社会の在り方を変え、持続可能社会に必要な科学技術の在り方を明示す



平成22年度「赤崎賞」授賞式

る研究を展開されたことに、深い感動を覚えます。先生と
言う存在を介して、日本文化の持つ力を実感いたします。
こんな素晴らしい発明が、名古屋大学の中から生まれた
事、そしてその同時代に名古屋大学で働く事に、改めて深
い感慨と誇りを感じております。

新年を寿ぐ書き初めに使われる漢詩に、「長生殿裏春秋
富 不老門前日月遅」という和漢朗詠集の一節があります。
常に時代の先鋭であろうとする不老門として、豊田講堂は
私達名古屋大学の象徴と言えます。実は、昨年愛知県の代
表的な酒造会社関谷酒造にお願ひし、名大を代表するお酒
を造っていただきました。名大が千種区不老町にあること
から、「名大 不老」と名付けました。同窓会の皆様、機
会があればぜひご賞味ください。

新しい年が、皆様にとって実りの多い年となる事を、名
古屋大学が益々その個性を光り輝かす年となる事を、心よ
り祈念いたします。

本学若手研究者が中川文部科学大臣へ提言を提出

本学の若手研究者が、11月29日(火)、中川正春文部科学大臣へ提言を提出しました。これは、中川大臣が10月3日(月)に本学に来訪した際に、若手研究者からの具体的な提言を期待する旨の発言があったことを受けて実現したものです。

提言は「博士を活かす国づくりに向けて－名大若手研究者からの提言－」と題し、新たなキャリアパス・キャリア



提言を説明する様子

の変更などについて、テニユアトラックについて、博士研究員(ポスドク)について、科研費について、大学院について、さらなる取り組みの6点からなっています。本学が継続的かつ計画的に若手職員を採用及び養成することを目的に推進している名古屋大学若手育成プログラム(Young Leaders Cultivation Program)所属の研究者が中心となって、若手研究者を下支えしてやる気を喚起する施策や仕組みをまとめました。

当日は、濱口総長陪席のもと、若手研究者有志5名が、文部科学大臣室において提言書を提出し説明を行いました。中川大臣は提言書を受け取り、今後の日本の大学の在り方などについて考えを述べ、現行制度の枠内で出来ることは対応し、今後、若手教員の意見を吸い上げる機会を設けることについて前向きに考えたいと話しました。

その後、愛知県選出の吉田統彦衆議院議員と提言について意見交換を行い、吉田議員から、科学研究費の基金化を更に拡充する取り組み等について熱心な思いが語られました。また、文部科学省若手職員との意見交換会も行われ、20名弱の同省職員と活発にやりとりしました。

ルース駐日米国大使が来学し、学生と対話

ジョン・ルース駐日米国大使が、11月25日(金)、本学を訪れ、学生と対話しました。

今回の来学は、日本の大学における国際化の現状と、学生の留学に対する意欲や懸念について関心を持っているルース大使から、日本人学生との対話を通じて相互理解を深めたいとの提案があり、実現しました。



スピーチをするルース大使

ルース大使はまず、渡辺副総長、戸田山教養教育院副院長、町田留学生センター長ら外国語教育や海外留学の担当教職員らとの意見交換を行いました。渡辺副総長が歓迎のあいさつを行った後、ルース大使から、本学へ再訪して大勢の学生と対話できることは喜ばしいとの言葉があり、次いで本学側から、海外留学の現状と課題、外国語教育における最近の取り組み及び海外の大学との単位互換制度などを紹介しました。

学生との対話では、初めにルース大使がスピーチを行い、国際的競争社会の中で若者に課せられた責任は極めて大きいこと、また日米関係は一層重要となることが語られました。これを受け、町田留学生センター長の進行のもと、1時間余りの間学生からの発言が続きました。

話題は多岐にわたり、我が国のTPPへの参加について見解を問うものや、米国の大学が魅力的な理由と日本の大学が海外の学生を惹きつけるための手掛かりを問う質問などがあがりました。またルース大使は、アップル社の創業者である故スティーブ・ジョブズ氏の生涯を紹介し、失敗や挫折が成功を秘めていることを示唆しました。

質疑応答後には、ルース大使自らESホールを満席にした学生達の中に入って、記念写真撮影を行いました。

濱口総長がグダニスク医科大学から名誉博士号を授与される

濱口総長は、11月24日(木)、ポーランドのグダニスク医科大学から名誉博士号を授与されました。

同大学とは、1995年に本学医学部と部局間学术交流協定を結んで以来、14名の学生を受け入れるとともに15名の本学学生を派遣したほか、研究者交流も積極的に行っています。今回の名誉博士号の授与は、総長が医学部に在籍して



学位記を手にする総長(右)

いた時代からの交流実績に加え、現在総長として進めている大学の国際化、国際交流を通じた人材育成への貢献が高く評価されたことによるものです。

授与式では、同大学幹部職員が列席する中、ジャニス・モリス同大学長のあいさつがあったほか、ウズニャック同大学教授から授与理由などが発表され、学位記が手渡されました。あいさつで総長は、40年前に米国に留学していた際の大学の同輩である若林 隆本学名誉教授とポプキンス同大学教授との友情、そしてそれが礎となって両大学の交流が強化されてきた経緯を説明しました。また、自身が研究を通してどのように両大学の交流に関わってきたかを説明し、この交流が若い世代に引き継がれるよう今後も協力していくことを表明しました。

また26日(土)には、ワルシャワの在ポーランド日本国大使公邸を訪問して山中 誠大使と会談し、情報交換を行いました。総長は、文部科学省のヤング・リーダーズ・プログラムとして外務省の協力を得ながら行っている医療行政分野での留学生の受入事業や、法学部がモンゴルやウズベキスタンで実施している日本法教育研究センターでの活動等、本学の国際交流の状況について説明しました。

濱口総長による講演会

「創基140周年を迎えて－名古屋大学の源流をたどる－」を開催

濱口総長による講演会「創基140周年を迎えて－名古屋大学の源流をたどる－」が、12月7日(水)、博物館講義室において開催されました。同講演会は、6日(火)から始まった名古屋大学創基140周年記念展示「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』－解剖学創始者のミュージアム－」に関連して開催されたもので、定員を超える約80名の聴講者が集まりま



講演する総長

した。

記念展示では、本学の黎明期である明治時代から大正時代において医学教育に献身した奈良坂源一郎の医学者及び博物学者としての多彩な業績を紹介しています。同展示を踏まえ、総長は「歴史は現在と過去との尽きることのない対話」、「歴史とは未来へのメッセージ」という視点に立ち、本学の源流や学生像、ノーベル賞研究が育まれた学問環境を振り返りながら、日本が現在直面している高齢化や資源枯渇等の様々な経済・社会問題に対してどのように対処すべきか、本学はどのような方向性を目指していくべきかといったことについて話しました。

一般の方が普段知る機会が少ない本学の最前線の情報と今後の展望が示されたため、聴講者は大いに刺激を受けたようで、講演後には活発な質疑応答が行われました。また、同講演会には名古屋大学史を研究している高橋 昭本学名誉教授、奈良坂源一郎関連資料の寄贈者である奈良坂 宏氏も参加しました。

グローバル30日本留学フェア2011を開催

グローバル30日本留学フェア2011が、11月27日(日)、ウズベキスタンのタシケント市において、ウズベキスタン文化・芸術フォーラム基金との共催により開催されました。

同フェアは、国際化拠点整備事業（グローバル30）の一環として、ウズベキスタンに海外大学共同利用事務所を持つ本学が、在ウズベキスタン日本国大使館、ウズベキスタ



記者会見の様子

ン高等中等教育省及び名古屋大学全学同窓会ウズベキスタン支部の協力を得て開催したもので、本学の他に、北海道大学、東北大学、筑波大学、明治大学、立命館アジア太平洋大学（APU）の6大学が参加しました。

開会に先立ち記者会見が行われ、山本理事から日本側を代表してあいさつがあり、名古屋大学ウズベキスタン事務所が、本学のみならず広く日本国内の大学とウズベキスタンの学生との交流等を推進するために設置され、ウズベキスタンから日本へ留学する場合の窓口としての重要な役割を担っていることなどの説明がありました。

当日は、雪模様の天候にもかかわらず、903名の高校生・大学生・保護者、58名の教育関係者、さらにはウズベキスタン国営放送をはじめとするメディア10社も来場し、大盛況のうちに終了しました。また日本側一行は、26日(土)にはウズベキスタン文化・芸術フォーラム基金を、28日(月)には在ウズベキスタン日本国大使館、ウズベキスタン高等中等教育省、タシケント国立法科大学及び世界経済外交大学を表敬訪問しました。

今回を機に、より多くのウズベキスタンの学生が日本に興味を抱いて留学し、両国の交流が一層促進されることが期待されます。

中国語スピーチコンテスト「江蘇杯」を開催

中国語スピーチコンテスト「江蘇杯」が、12月10日(土)、豊田講堂第1会議室において開催されました。

同コンテストは、中国語を学んでいる学生に対して、これまで学習した中国語を披露する場を提供することにより、中国語学習意欲の更なる向上を目指すとともに、中国への理解を深める機会となることを期待して、中国の江蘇



受賞者の記念撮影の様子

国際文化交流センター及び本学の協定校である南京大学との共催で開催したものです。応募資格は本学学生で中国語を母語としない中国語圏内在住通算2年未満の者とし、初級コース及び中・上級コースに分けて募集し、合計44名の応募者の中から1次予選を通過した29名が参加しました。

当日は、濱口総長及び張煥發江蘇国際文化交流センター副秘書長から開会のあいさつがあった後、コンテストが開始されました。初級コースは、自己紹介と課題文の暗唱朗読を、中・上級コースは、テーマ「中国と私」に関するスピーチと中国江蘇省紹介映像に関する質疑応答を、それぞれ中国語で行いました。初級コースからは24名の発表があり、中国人留学生をチューターとして練習した成果が披露されました。中・上級コースからは5名の発表があり、中国人審査員からの質問に対しても流ちょうに返答し、機転の利いた回答に時折会場から笑い声も聞かれました。審査は、本学教員2名、江蘇国際文化交流センター職員1名、南京大学教員2名の合計5名の審査員より行われました。

呂浩雪南京大学海外教育学院副院長から講評が行われた後に結果が発表され、特賞1名、1等賞4名、優秀賞10名の各受賞者に賞状が贈られました。

田中靖郎特別教授が日本学士院新会員として選定される

田中靖郎本学特別教授が、12月12日(月)、日本学士院新会員として選定されました。

同院は、学術上功績顕著な科学者を優遇し、学術の発達に寄与するため必要な事業を行う機関であり、会員は学術で顕著な功績を修めた科学者から選ばれ、終身任期の国家公務員特別職の身分が付与されます。現在、会員は、人文

科学部門で63名、自然科学部門で78名の計141名です。

田中特別教授の専門は天文学で、X線天文学分野において、衛星計画を主導するとともに、中性子星X線源とブラックホールX線源のX線スペクトルの相違を示すなど、X線放射の研究に貢献しました。



本学特別教授称号授与式における記念撮影

平成23年度博士課程教育リーディングプログラムに採択される

平成23年度博士課程教育リーディングプログラムが選定され、本学から2件が採択されました。

同事業は、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進することを目的とするものです。

事業は、国内外の政財官学界で活躍し、グローバル社会を牽引するトップリーダーを養成する、大学の叡智を結集した文理統合型の学位プログラムを対象とした「オールラウンド型（オールラウンドリーダー養成）」、環境、生命健康、安全安心、物質、情報、多文化共生社会等のテーマで、人類社会が直面する課題の解決に向けて、産学官等のプロジェクトを統括し、イノベーションを牽引するリーダーを養成する、複数領域を横断した学位プログラムを対象とした「複合領域型（複合領域リーダー養成）」、世界的に独自の優れた資源を活かし、新たな分野を拓くリーダーを養成

する学位プログラムを対象とした「オンリーワン型（オンリーワンリーダー養成）」の3プログラムにそれぞれ分かれています。

申請は、全体で101件（63校）あり、採択されたのは、21件（13校）でした。（採択率20.8パーセント）

本学が採択された事業は以下のとおりです。

複合領域型（環境）（採択件数4／申請件数20）

プログラム名：グリーン自然科学国際教育研究プログラム
 コーディネーター名：阿波賀邦夫物質科学国際研究センター教授
 連携先機関：自然科学研究機構分子科学研究所、
 自然科学研究機構基礎生物学研究所

オンリーワン型（採択件数6／申請件数34）

プログラム名：法制度設計・国際的制度移植専門家の養成プログラム
 コーディネーター名：松浦好治法学研究科教授

平成23年度永年勤続者表彰式を開催

平成23年度名古屋大学永年勤続者表彰式が、11月22日(火)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

被表彰者28名のうち23名が出席した表彰式では、濱口総長から一人ひとりに表彰状と記念品が手渡された後、総長から「日本は非常に厳しい状況をずっと越えてきて、3月11日には東日本大震災という大きな震災があり、これから



記念撮影

の先行きはなかなか厳しいものがあります。ただ、いろいろなことがありましても、一番の基本は毎日の仕事をまずきちっと進めるということが、日本という国の、この国の形を作ってきたのだと思います。これから我々が、この日本の国を若い世代にずっと順々と渡して行って、彼らが希望を持って働ける環境を作っていかなければならないと思います。健康に留意されて、家族を大切にさせていただいて、職場の同僚とともに、まっすぐ働いていただくことをお願いいたします」と祝辞がありました。

その後、被表彰者を代表して深尾直樹財務部財務課掛長から「法人化後の激変した環境の中、変化を恐れず常に学び、自らの役割を自覚して確固たる信念を持ち、名古屋大学の一員であることを誇りに思い、これからも職務に従事していきたい」と決意のこもった謝辞が述べられました。

最後に、同ホールにおいて記念撮影が行われました。

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーを開催

若手女性研究者サイエンスフォーラム・女子中高生理系進学推進セミナーが、11月26日(土)、ES総合館ESホール及びES会議室において開催されました。

まず、男女共同参画を担当している藤井理事からあいさつがあった後、前半は、土井美和子株式会社東芝研究開発センター主席技監、上川内あづさ理学研究科教授が特別講

演を行いました。続いて、女子中・高校生に対してポスター発表の聴き方、見方のポイントを伝えるポスターガイダンスを挟み、後半は、若手女性研究者33名によるポスターセッションが行われました。ポスターセッション会場では、中・高校生にも分かりやすく説明を行う発表者や、高度な質問に的確に回答する発表者等、来場者層に合わせて対応する場面が見受けられ、発表者と熱心に聴き入る来場者との活発なやりとりが、あちらこちらで繰り返されました。

最後に、ポスターセッションに対する投票が行われ、得票数により、理学研究科博士課程前期課程1年の八木亜樹子さん、工学研究科博士課程前期課程2年の青木淑恵さん、赤坂茉莉理学研究科特任助教、生命農学研究科博士課程前期課程2年の美辺詩織さんの4名に、藤井理事から総長賞が授与されました。

愛知、岐阜、三重の東海3県の女子中・高校生とその保護者、中・高等学校の教員、本学の研究者など約130名が来場しました。



講演する上川内教授

東海地域の課題を考える産官学懇談会を開催

東海地域の課題を考える産官学懇談会が、12月15日(木)、開催されました。

学術憲章では、名古屋大学の社会的貢献の基本目標の1つとして、「その立地する地域社会の特性を生かし、多面的な学術研究活動を通じて地域の発展に貢献する」ことを掲げています。本学は、東海地域の諸課題の解決に向けて、



あいさつをする宮田理事

自ら研究を行いその成果を発信してだけでなく、媒介役としての役割も期待されており、同懇談会はその取り組みの一環として、今回初めて開催したものです。中部経済連合会、愛知県、名古屋市などの自治体、日本政策金融公庫、日本政策投資銀行などの公的金融機関、東海財務局や中部経済産業局、日本銀行といった国の機関、本学と産学連携協定を結んでいる民間金融機関、コンサルティング会社等に参加を呼びかけました。

宮田理事のあいさつの後、家森社会連携推進室長が懇談会の趣旨について説明し、続いて木村 聡愛知県産業労働部長が「あいち産業労働ビジョン2011-2015」と題し、基調講演を行いました。次いで、初行隆男東海財務局理財部長が東海財務局における地域連携の取り組みについて説明をし、その後参加者全員が、自機関の地域課題に対する取り組みの状況や問題について説明しました。

地域の政策課題の解決を目指すにあたって意義深い懇談会となりました。

「プロフェッショナル仕事の流儀 in 名古屋大学」を開催

「プロフェッショナル仕事の流儀 in 名古屋大学」が、11月19日(土)、ES総合館ESホールにおいて開催されました。

同行事は、社会貢献人材育成本部ビジネス人材育成センターが文部科学省科学技術人材育成費補助事業ポストドクター・インターンシップ推進事業に選定された「社会貢献若手人材育成プログラム」の一環として行っている「長期



パネルディスカッションの様子

インターンシップ制度」を利用して、環境学研究科博士課程後期課程1年の学生がNHKの協力を得て企画したものです。長期にわたるNHKとの会議や濱口総長をはじめとした教員たちとの打ち合わせを重ねて実現に至ったもので、当日は、様々な研究科の学部1年生からポストドクターまで約130名が参加しました。

初めに総長、佐藤幹夫NHK名古屋放送局長からあいさつがあり、佐藤 章キリンビール九州統括本部長が「プロフェッショナルの20代」というテーマで、自身の挫折や転職の経験から缶コーヒー開発の裏話に至るまで、貴重な記録映像を交えて講演しました。その後、総長、佐藤局長、佐藤統括本部長、山本隆之NHK制作局チーフプロデューサーの4名でパネルディスカッションを行いました。

通常の形式と異なり、会場の参加者と登壇者の対話・質疑応答の場としたこのパネルディスカッションでは、学生が所属する研究科により異なる視点で質問し、登壇者はプロフェッショナルとして挑戦することの面白さを熱心に語りました。

下駄の鼻緒奨学金の授与式を挙

下駄の鼻緒奨学金の授与式が、12月7日(水)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

下駄の鼻緒奨学金は、学術憲章の基本理念及び寄附者の意向に基づき、本学の学部又は研究科に在学する人物で、成績が優秀でありながら経済的な理由により修学が困難な学生に対して、その学習・研究等の活動を奨励するために



記念撮影

昨年度新たに設立されました。

学生支援を担当する杉山理事から「学生時代に下駄の鼻緒を切らし困っていた本奨学金の寄附者に、下駄の鼻緒を譲り渡した通りがかりの女性がかけた、『お礼は自分ではなく次に困っている人に返してください』との言葉の通り、社会還元の精神を持ち、奉仕の精神、互いに助け合う精神を受け継いで、さらに学業や研究に励んでいただきたい」とあいさつがあった後、奨学生4名（日本人学生2名、外国人留学生2名）に奨学生採用通知書が手渡されました。

年末キャンパスクリーンを実施

年末キャンパスクリーン（屋外清掃）が、12月13日(火)、実施されました。

これは、環境月間である6月に例年実施している環境美化週間「キャンパスクリーンウィーク」とともに、大学構内環境美化運動の一環として平成元年から実施しているものです。また、本学は名古屋市の一構成員であるという認識のもと、境界の外周清掃も併せて行い、環境美化に努め

ています。

奥村施設管理部長をはじめとした参加者は、東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれ、空き缶・紙くず等の除去、雑草等の刈り取り、不要なビラ等の撤去などを行い、爽やかな汗を流しました。

なお、今年は名古屋市のごみ分別区分が変更されたため、変更内容の説明を行い、参加者の分別意識を高めました。



説明を受ける職員



清掃の様子

第75回防災アカデミーを開催

第75回防災アカデミーが、12月2日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

今回は、中林一樹明治大学政治経済学研究科特任教授により、「二元復興の国土づくり～東日本の災害復興から西日本・首都圏の事前復興へ～」と題した講演が行われ、一般市民など約100名が参加しました。



講演する中林特任教授

講演ではまず、この15年余りの間に我が国で発生し震度7を記録した地震である阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災の教訓をわかりやすく説明し、次に、現在想定されている東京湾北部直下地震や、東海地震、東南海地震、南海地震が起こった場合に受けるであろう被害を解説しました。その上で、東日本大震災の迅速な復旧及び復興を進めるとともに、東海・西日本や首都圏で地震被害を繰り返さないために、長期的な視野に立った地域構造・国土構造づくりを進める「二元復興の国土づくり」という考え方を示しました。

さらに、東日本大震災をはるかに超える被害が見積もられている首都直下地震や東海・東南海・南海連動型地震を想定し、その被害を可能な限り減らすために、地震による直接被害の軽減、その後の被害拡大の抑制、間接被害の軽減などを総合的に進める「事前復興」という発想を提示し、東京における取り組みを紹介しました。また、都市全体で震災に強いランドデザインを策定した上で、地区ごとの復興計画を作り、さらに防災訓練などソフト面の対策も併せて進めるといった事前復興の枠組みをわかりやすく解説しました。

フロリゲンの多様な機能

木下 俊則 大学院理学研究科教授

植物の多くは日の長さ（日長）に応じて花を咲かせます。たとえば、菜の花は、春に日長が長くなるのに応答して花芽を付け、開花します。また、アサガオやイネは、夏至を過ぎ、日長が短くなるのに応答して開花します。前者を長日植物、後者を短日植物と呼び、植物は生活環の中でその植物にとって最適な時期に開花し、種子を実らせるように進化してきました。これまでの研究により、日長は植物の葉で計測され、葉で作られた未知の物質が植物の茎頂にある分裂組織に移動し、それまで葉を作っていた分裂組織に花芽を付けさせるように指令を出していることがわかり、75年前にその物質はフロリゲン（日本語では花成ホルモン）と名付けられました。しかしながら、フロリゲンの正体は長らくの間まったく不明でした。2007年になって、FLOWERING LOCUS T (FT) と呼ばれるタンパク質が日長に応じて葉で作られ、葉脈（維管束）の篩管を通して茎頂に移動し、転写因子と結合することで花芽形成を誘導しているこ

とが明らかになり、FT が長年探し求められてきたフロリゲンの正体であることが証明されました。しかし、花芽誘導は植物にとって栄養成長から生殖成長に切り替わる非常に大きなイベントであるにもかかわらず、FT の花芽誘導以外の機能は知られていませんでした。

私たちの研究室では、固着生活をおこなう植物が、変転する環境変化（光、土壤の水分状態や温度など）にどのようにして応答して生きているのか、いわゆる「植物の環境応答」について、植物の表皮に存在する気孔を主な実験材料として研究を進めています。気孔は、植物が光合成を盛んに行う太陽光下に開口して二酸化炭素の取り込み、蒸散や酸素の放出などガス交換を促進し、一方、植物が乾燥ストレスに曝されると、植物ホルモンであるアブシジン酸に反応して閉鎖し、植物体からの水分損失を防いでいます。このように気孔は、陸生植物の生存に不可欠な働きを担っていますが、同時に、気孔の開・閉という明確な細胞

応答を示すことから、植物の環境応答のモデル細胞としても大変優れた特質を有しています（図1）。これまでの私たちの研究により、光による気孔開口には、フォトトロピンと呼ばれる青色光受容体が関与しており、フォトトロピンが光を受容すると細胞膜プロトンポンプという酵素を活性化することによって、気孔開口を誘導していることなどが分かってきました（Nature 2001）。

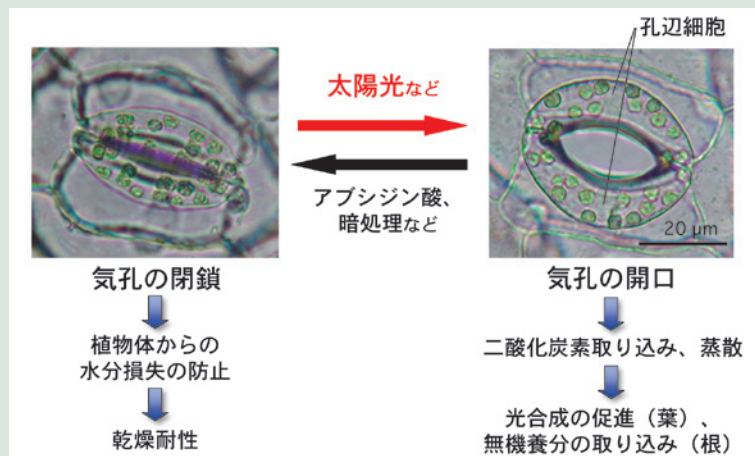


図1 気孔の構造と働き

最近、気孔が異常に開いた突然変異体の解析を進めたところ、興味深いことに、気孔を構成する孔辺細胞に、上述したフロリゲン FT が多量に含まれていることが判明しました。そこで、孔辺細胞に人為的に FT タンパク質を過剰発現させたところ、気孔は大きく開き、FT の機能欠損変異体では気孔開口が抑制されていることが明らかとなり、FT は気孔においても発現し、気孔の開口を促進する役割を果たしていることが分かってきました (図 2、Current Biology 2011)。このことは、植物は花を咲かせる時、同時に気孔開口を促進し、光合成活性を高めることによって、花芽誘導や種子の成熟を促進していると考えられ、植物の花成時における FT の新たな機能の発見となりました。現在は、どのようにして FT が気孔開口を誘導しているのか、その分子メカニズムの解析を進めています。

動物とは異なり、植物は中枢神経を持たず、各々の細胞や組織が自律的に機能している場合が多いのですが、花成誘導は、葉から茎頂へ師管を介した長距離シグナル伝達を行っている珍しい例の一つです。花芽を作る茎頂の分裂組織においても、日長を感知する光受容体は発現していますので、茎頂で FT を発現すればいいと思われそうですが、どうしてわざわざ葉で FT を発現し、茎頂まで運んでいるのか、その理由については明確な説明が

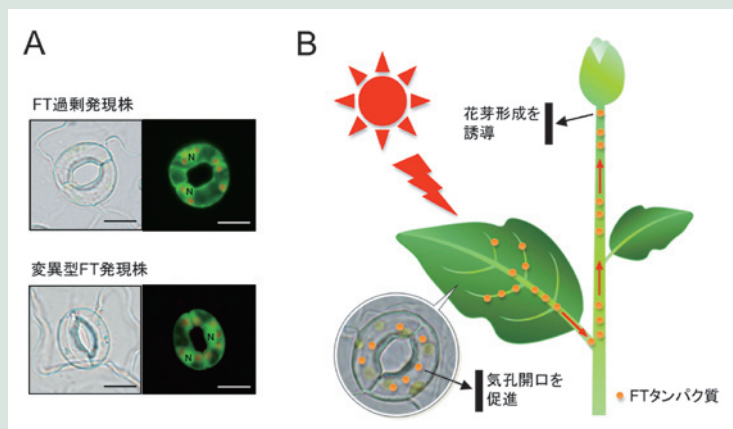


図2 FTによる気孔開口の促進

(図 A) モデル植物シロイヌナズナの気孔孔辺細胞に緑色蛍光タンパク質 (GFP) との融合タンパク質として FT を過剰発現させると気孔は異常に開口するが、機能を欠損した変異型 FT を過剰発現させても気孔開口は誘導されない。左は明視野像、右は蛍光像 (緑: GFP 蛍光、赤: クロロフィル蛍光)。バーは 5 μm 、N は核を示す。(図 B) 植物における FT の働き概念図。FT は、日長に応じて葉の維管束で発現し、師管を通じて茎頂に移動し、花芽形成を誘導するのみならず、気孔孔辺細胞においても発現し、気孔開口を促進する働きを持つ (作画: 中條誓子)。

できていません。これまで FT については、花芽誘導に関してのみ研究が進められてきましたが、今回の発見をきっかけとして、FT の植物における多様な機能が明らかになるのではないかと考えています。

また、本研究により、気孔における FT 量を調節することによって気孔開度の人為的な調節が可能であることが初めて示されました。今後、この技術を利用し、二酸化炭素吸収能の増大した植物体の作出など、植物を利用した二酸化炭素削減への応用が考えられ、昨今問題となっている地球の二酸化炭素増加の問題の解決にも貢献できると期待しています。

略歴：1993年九州大学大学院理学研究科修士課程修了、1993年日本学術振興会特別研究員、1994年九州大学理学部教務員、1999年九州大学大学院理学研究科助手、2007年名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻准教授を経て、2010年より教授。博士 (理学) 九州大学。2003年～2004年米国 Salk 研究所訪問研究員、2005年～2009年 JST さきがけ研究員。
抱負：植物の巧みな環境応答能・環境突破力の理解
趣味 (関心ごと)：生き物採集、東山の森の遷移

きのした としり



内田 良

大学院教育発達科学研究科准教授

危険は無限、資源は有限―エビデンスから学校の安全を考える

階段から転げ落ちる、熱中症で倒れる、登下校時に車にはねられる… 学校生活には、危険が無限にあります。しかしながら、それらの危険を防止するための資源（ヒト・モノ・カネ）には限りがあります。たとえば、不審者対策に手間をかければ、その分、他の安全対策が疎かになります。「危険は無限、資源は有限」―私たちは、無数の危険のなかからある特定の危険を拾い上げ、そこに限りある資源を投入しているということ、自覚しなければなりません。手当たり次第にあるいは衝動的に危険を見つけて、安全策を講じればよいというわけではないのです。

これまで教育学は「子どもの安全」を強調しながらも、危険の選択には慎重さを欠いてきました。毎年度、学校管理下における子どもの死亡・障害事例の件数と概要が公表されています。しかしながらそれを過去にさかのぼって事故カテゴリ別に加算したり、あるいはそれを生徒数で除して発生率を算出したりということには手をつけてきませんでした。ごく基本的な計算さえなされないまま

に、「子どもの安全」が議論されてきたのです。

ここで、数字に基づく分析の一例として、スポーツ中の事故をみたいと思います。図には、中学校と高校の過去10年間（2000～2009年度）における部活動による死亡事故の発生率を示しました。各部活動における死亡事故の件数を、部活動の登録生徒数で除した値です。中学校では柔道が、高校では柔道とラグビーが突出して高いことがわかります。この知見からは、スポーツに関して漫然と一律の安全策を考えるのではなく、まずは真っ先に柔道とラグビーの事故について対策を講じるべきであることがわかります。

私が目指しているのは、エビデンス・ベーストによる学校安全施策です。施策の立案は、実証的なデータに基づいてこそ進められるべきであり、それこそが、より確実で効率的な「子どもの安全」を導くことになるのです。

（なお、学校事故の情報については、私が管理するウェブサイト「学校リスク研究所」に随時掲載しています。ご参照いただければ幸いです。）

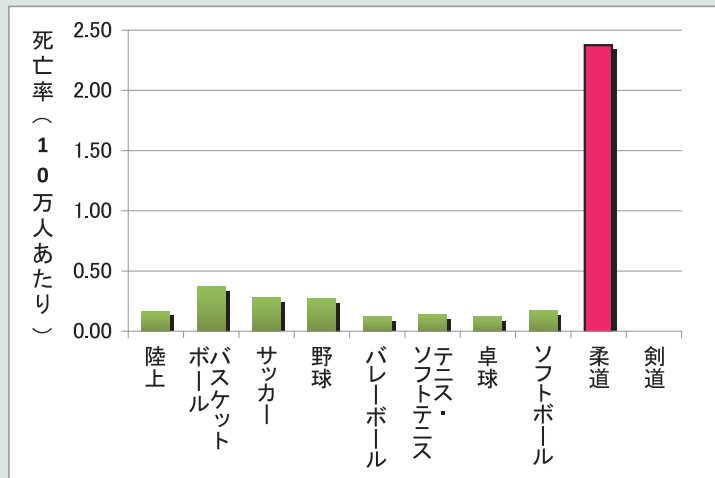


図1 中学校の部活動における死亡率（2000年度～2009年度）

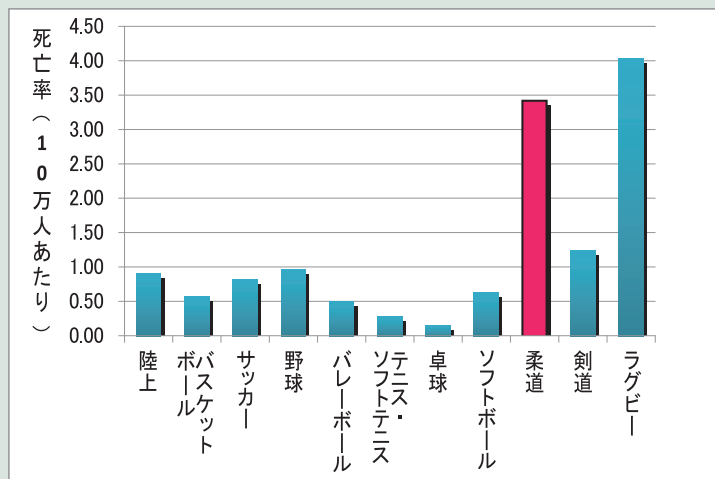


図2 高校の部活動における死亡率（2000年度～2009年度）



名古屋大学体育会は、12月6日(火)、豊田講堂第1会議室において、平成23年度名古屋大学体育会会長表彰 表彰式を挙行了しました。

この表彰は、本学体育会における優秀な個人・団体及びその指導者の栄誉を讃え、その功績を広く顕彰することを目的としたもので、今回で23回目となります。

今年度は、体育会会長表彰審査会の審査を経た「個人の部」9名、「団体の部」4団体が本学体育会会長である濱口総長から表彰され、1年間のめざましい成果を讃えられました。

なお、受賞した個人及び団体には、副賞として名古屋大学校友会から記念品等が贈呈されました。

平成23年度 名古屋大学体育会会長表彰 受賞者一覧 (表彰対象期間：平成22年11月1日～平成23年10月31日)

個人の部 (9名)

個人名	所属学部・学年	所属団体名	表彰要綱該当条項	出場大会名及び成績
1 池野 千紘	教育学部・3年	トライアスロン部	一般賞 (第4条2項2号)	2011年度学生トライアスロン選手権大会 日本学生トライアスロン連合杯 優勝
2 山本 真也	工学部・3年	アーチェリー部	一般賞 (第4条2項1号)	第66回国民体育大会 アーチェリー競技成年男子個人 愛知県代表選手として出場
3 柴田 美紀	理学部・4年	馬術部	一般賞 (第4条2項2号)	第46回中部学生自馬競技大会 学生賞典馬場馬術大会 優勝
4 押村 朋香	教育学部・2年	女子ラクロス部	特別賞 (第4条1項1号)	U-19 Women's Lacrosse World Championship 2011 19歳以下日本代表選手として出場
5 河野 元	法学部 (平成22年度卒業)	フィギュアスケート部	一般賞 (第4条2項3号)	第31回国立大学フリースケーティング競技会 選手権クラス男子 優勝
6 吉田 圭佑	経済学部・3年	ライフル射撃部	一般賞 (第4条2項2号)	第40回中部学生ライフル射撃三姿勢大会 10m エアライフル三姿勢3×20発競技 優勝
7 佐久間奈穂	法学部・4年	馬術部	一般賞 (第4条2項2号)	第25回中部学生フレンドシップ馬術大会 中障害飛越競技C、中障害飛越競技D 優勝
8 鈴木亜由子	経済学部・2年	陸上競技部	一般賞 (第4条2項2号)	天皇賜盃第80回日本学生陸上競技対校選手権大会 女子5000m 優勝
9 松井 健哉	工学研究科 M1年	オリエンテーリング部	一般賞 (第4条2項3号)	2010年度日本学生オリエンテーリング選手権大会 ミドル・ディスタンス競技部門男子選手権クラス 準優勝

団体の部 (4団体)

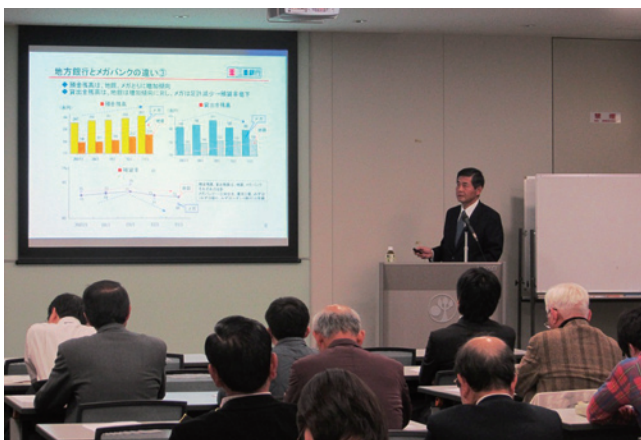
団体名	代表者		表彰要綱該当条項	出場大会名及び成績
	氏名	所属学部・学年		
1 オリエンテーリング部	野中 良樹	法学部・2年	一般賞 (第4条2項3号)	2010年度日本学生オリエンテーリング選手権大会 リレー競技部門 準優勝
2 ハンドボール部	山田 安彩	農学部・2年	一般賞 (第4条2項3号)	第50回全国七大学総合体育大会 ハンドボール競技 4連覇
3 航空部	湯地 恒太	工学部・3年	一般賞 (第4条2項2号)	第51回全日本学生グライダー競技選手権大会 団体優勝
4 ライフル射撃部	四ノ宮悠司	工学部・2年	一般賞 (第4条2項2号)	第29回中部学生ライフル射撃伏射大会 10m エアライフル伏射60発競技 団体優勝
			一般賞 (第4条2項2号)	第79回中部学生ライフル射撃選手権大会 10m エアライフル立射60発競技 団体優勝
			一般賞 (第4条2項2号)	第40回中部学生ライフル射撃三姿勢大会 10m エアライフル3×20発競技 団体優勝
			一般賞 (第4条2項2号)	第23回中部女子学生ライフル射撃選手権大会 10m エアライフル立射40発競技 団体優勝

第13回名古屋ビジネスセミナーを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、11月24日(木)、日本経済新聞社名古屋支社会議室において、経済学部同窓会である社団法人キタン会との共催により、第13回名古屋ビジネスセミナーを開催しました。

同セミナーは、同センターが推進している産学官連携活動の成果を地域社会に提供するため継続されているもの



講演する種橋頭取

で、今回は杉田伸樹同センター教授の司会により、金井同センター長の開会あいさつの後、種橋潤治株式会社三重銀行頭取による「地域とともにー地域金融機関の役割ー」と題する講演が行われました。

種橋頭取は、現職以前にメガバンクで要職を歴任した経験を活かして、地方銀行とメガバンクの違いを、非金利収益比率、国際部門比率、オーバーヘッドレシオ(OHR)などの数値を示しながら具体的に解説しました。さらに、地方銀行を取り巻く環境について、企業部門の金融負債、家計部門の金融資産の変動を踏まえ、貸金利回りや預貸金利鞘の低下傾向を検出しました。その上で三重銀行自体を取り上げ、営業体制や業務内容の改革だけでなく、NPO支援、「みえぎん まなびの森」づくりなど、社会貢献活動の充実にも力を注いでいることを紹介しました。

会場では80名近くの参加者が熱心に耳を傾け、講演後には地域社会における地方銀行の存在意義、金融グローバル化が進行する中での地方銀行の展開方向、地方銀行が大学や学生に期待すること等について、活発な質疑応答が行われました。最後は、岡田邦彦キタン会会長が閉会のあいさつをしました。

理農館の看板上掲式を挙行

●大学院理学研究科、大学院生命農学研究科

大学院理学研究科、大学院生命農学研究科は、12月12日(月)、理農館の看板上掲式を挙行了しました。

理農館は、理学と農学分野の先進的研究環境を一体的に整備することを目指し、関連する両研究科の研究室を効率的に集約し、野依記念物質科学研究館及び理学館からの増築棟として建設されたもので、地上6階、地下1階建てです。2つの部局が同じ建物に入居する合築方式は、部局間の垣根の低い本学の自由な風土に根ざしており、今年6月

に開館したES総合館に続くものです。

上掲式は、両研究科の多数の教職員が見守る中で行われ、濱口総長の揮毫による「理農館」の銘板を、総長、藤井理事、高橋理事、國枝理学研究科長及び服部生命農学研究科長の5名により同館正面玄関に上掲し、両研究科の複合研究棟の開設を祝いました。

式終了後には、両研究科長の案内で、研究室、学生実験室等を中心に館内の見学が行われました。



上掲式の様子



完成した理農館全景

環境学研究科創設10周年記念行事を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、11月19日(土)、豊田講堂において、同研究科創設10周年記念行事を開催しました。

当日はあいにくの雨でしたが、講演会には一般の方々140名を含む300名が来場しました。初めに、溝口環境学研究科長があいさつをするとともに、「環境学研究科の10年」と題し、平成13年4月の創設以来10年にわたる同研究科の



記念式典の様子

歩みを紹介しました。続く公開講演会「環境学－地球・都市・社会－」ではまず、浅岡美恵 NPO 法人気候ネットワーク代表が「未来社会を選択－大震災後のエネルギーと環境－」と題し、日本のエネルギー事情と今後のあり方について、地球温暖化問題との関連も含めて講演しました。次いで、尾池和夫財団法人国際高等研究所長が「季語の地球科学－変動帯に生きる－」と題して、私たちの生きる地球や日本列島の成り立ち、及びそこで営まれる暮らしについて、季語や俳句を織り交ぜつつ講演しました。

その後シンポジウムホールで行われた記念式典には、来賓及び招待者を含む150名が参加しました。溝口研究科長、濱口総長のあいさつの後、来賓の磯田文雄文部科学省高等教育局長（田頭吉一国立大学法人支援課課長補佐代読）、米谷 仁環境省地球環境局総務課長、菅原章文中部経済連合会常務理事より祝辞が述べられました。

式典終了後は、ホワイエにて記念祝賀会を開催し、初代研究科長である小川克郎名誉教授のあいさつに続き、藤井理事の発声で10周年を祝し乾杯を行いました。

エコトピア科学に関する国際シンポジウム2011を開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、12月9日(金)から11日(日)の3日間、野依記念学術交流館、IB 電子情報館、ES 総合館等東山キャンパス内の会場において、「エコトピア科学に関する国際会議2011 (ISETS '11)」を開催しました。

同会議は、同研究所設立の理念に沿った活動の一環で、持続可能な社会を目指して開催された「万博記念国際



講演の様子

フォーラム」のサテライト・シンポジウムとして、「エコトピア科学に関する国際会議2005」を開催したのが始まりで、その後隔年で開催しており、今回で4回目となります。エコトピア科学に関わる様々な分野の研究者に発表・討論・情報交換を行う場を提供することを目的としています。

会期中には、オーガナイズドセッションやポスターセッション、世界的に著名な科学者及び技術者による講演が行われ、日本をはじめ、インド、インドネシア、オーストラリア、カナダ、韓国、スイス、スペイン、タイ、中国、ドイツ、米国、マレーシア、ロシア等各国から総計約400名が参加し、各会場において、最新の研究成果に関する活発な討論が展開されました。

また最終日には、ISETS '11市民公開講座「環境とエネルギー」に関する講演会を IB 電子情報館において開催し、111名が参加しました。講演会の第1部では、放射性物質と環境をテーマに、現状と課題に加え化学からの貢献という立場から解説が行われ、第2部では、次世代のエネルギー源をテーマに、原子力に替わるエネルギー源について、地球環境を保全しながら人類の生き残りを図る「エコトピア科学」の観点から解説が行われました。

第11回遺伝子実験施設公開セミナーを開催

●遺伝子実験施設

遺伝子実験施設は、12月9日(金)、理学南館大講堂において、第11回遺伝子実験施設公開セミナー「食と健康とDNA」を開催しました。

同セミナーでは、片寄裕一農業生物資源研究所農業生物先端ゲノム研究センター先端ゲノム解析室長が、「次世代シーケンサーを使った植物ゲノムの解析」と題して、我



講演する田中チームリーダー

が国と世界の植物ゲノム研究の動向について紹介しながら、国産大豆のゲノム解析の最新成果を発表しました。

続いて、斉藤憲治中央水産研究所水産遺伝子解析センター資源培養研究室長が「マグロのゲノムシーケンス」と題し、クロマグロのゲノム DNA の大きさと遺伝子の総数がメダカ並みであることや、クロマグロではエネルギー代謝や視覚関連の遺伝子が特化していることなど、興味深い研究成果を発表しました。

最後に、田中雅嗣東京都健康長寿医療センター研究所健康長寿ゲノム探索チームリーダーが「長寿あるいは老化促進に関わるミトコンドリアおよび核ゲノム多型の探索」と題し、きんさん・ぎんさんのミトコンドリア DNA や、様々な老化関連遺伝子が次々に発見されていることなどを紹介しました。

本学の教員、学生及び一般市民を含む90名の参加者は、講演に熱心に聞き入っていました。

第13回国際研究集会を開催

●グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

グローバル COE プログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」は、12月9日(金)から11日(日)までの3日間、文系総合館カンファレンスホールにおいて、第13回国際研究集会を開催しました。

「哲学的解釈学からテキスト解釈学へ」をテーマとした今回は、初日に、羽賀文学研究科長からあいさつがあり、



会場の様子

次いで拠点リーダーである佐藤彰一同研究科特任教授より開会の辞が述べられた後、組織責任者である松澤和宏同研究科教授が趣旨説明を行い、存在論として深化された哲学的解釈学を踏まえながら、テキスト論の諸成果を批判的に摂取することで、解釈学としての人文学の展望が拓かれていくことが示されました。

講演・研究報告では、連日英語、フランス語、日本語の言語の差異を超えた対話が実現されました。野家啓一東北大学教授は、科学哲学の領域においても解釈学の有効性が世界的に認められてきた経緯を明快に説きました。また、ガダマー研究の第一人者であるジャン・グロンダン モントリオール大学教授は、解釈学的経験の場としてのテキストについての考察を、文学的解釈学の権威であるピエール・グロード パリ第4ソルボンヌ大学教授は、具体的な作品解釈を通じた解釈学的読解の射程と魅力をそれぞれ示しました。

さらに、森際康友法学研究科教授等によって法テキストの解釈学をめぐる講演・研究報告もなされ、人文学者と法学者との間で、予定時間を超えてテキスト解釈をめぐる議論が交わされました。

第3回グローバル COE 国際シンポジウムを開催

●グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」

グローバル COE プログラム「機能分子医学への神経疾患・腫瘍の融合拠点」は、12月8日(木)、9日(金)の2日間、ミッドランドスクエア内ミッドランドホールにおいて、第3回グローバル COE 国際シンポジウムを開催しました。同シンポジウムは、神経と腫瘍の世界的研究者を国内外から招へいし、最新の研究に関する情報交換を行うと



会場の様子

ともに、若手研究者に国際的な研究発表の場に参加する機会を提供すること等を目的として開催しています。

今回は、「革新的治療法開発をめざしたがん研究の新たな展開」をテーマとし、ハーバード大学、カリフォルニア大学サンフランシスコ校、エモリー大学、オクラホマ大学、台湾大学などから6名、国内から5名の著名な研究者を招へいし、大学院医学系研究科からも3名の研究者が加わり、遺伝子解析、分子イメージングなどに関する最新の研究成果など、がんの基礎から臨床応用にわたる革新的な研究について、講演と議論を行いました。

ポスターセッションでは、国立長寿医療研究センター、愛知県がんセンター及び同研究科の若手研究者を中心に60件のポスター発表があり、英語による活発な質疑応答が行われました。学内外から200余名の参加者があり、盛会のうちに幕を閉じました。

古楽研究会第31回定期演奏会を開催

●博物館

博物館は、11月23日(水)、同館展示室において、古楽研究会第31回定期演奏会を開催しました。

同企画は、本学学生の文化サークルである古楽研究会の定期演奏会を博物館と共催しているもので、博物館で開催するのは今年で4年目となります。

コンサートでは、古楽器を使用し、16世紀から18世紀の

ルネッサンス及びバロック期の古楽全10曲が、2時間半にわたり演奏されました。

途中、リコーダー、チェンバロ、リュート、ビウエラなど、普段目にする事のない楽器の解説もあり、珍しい内容のコンサートに170名の聴衆は大いに満足した様子でした。



会場の様子

第21回企画展「ミクロの美術館 顕微鏡で見た人体の世界」を開催

●博物館

博物館は、9月13日(火)から11月19日(土)まで、同館展示室において、第21回企画展「ミクロの美術館 顕微鏡で見た人体の世界」を開催しました。

同企画展は、名古屋大学創基140周年記念として企画し、芸術文化振興基金助成事業として実施しました。期間中5,000名の来場を見込んでいましたが、予想を上回り6,000名を超える方々が来館しました。

展示されたのは、解剖組織学図や電子顕微鏡写真、様々な種類の顕微鏡などです。解剖組織学図は、本学の技官であった木戸史郎画伯によって描かれた人体組織学図の原図で、本学医学部解剖学教室の戸苅近太郎教授(当時)によって著され昭和29年に南山堂より刊行された日本初の本格的な教科書「組織学」の挿入画としても使われ、現在でも医学部の組織学実習の教材となっています。電子顕微鏡写真は、光学顕微鏡のプレパラート標本を忠実に描写した原図に関連するものが展示されました。

さらに、工学部で研究開発され日本電子株式会社により製品化されたイオン顕微鏡や、大正9年にドイツより輸入された大型装置、金属顕微鏡、偏向顕微鏡、明治時代の光学顕微鏡とマイクロトームなど歴史的な顕微鏡が展示されました。明治時代の光学顕微鏡は、アメリカのボッシュ社製で、本学医学部の前身にあたる愛知医学校の解剖局が所蔵していたとみられます。顕微鏡木箱には「愛知医学専門学校 解剖学教室」「名古屋医科大学」「名大医学部」のラベルが見られ、医学部の歴史を感じる貴重な資料です。また、電子顕微鏡試料作製には欠かせない、ウルトラマイクロトーム、ガラスナイフメーカーやビブラトームも展示されました。中でも、ウルトラマイクロトーム MT-1型は昭和28年に考案された機械式試料送り機構を持つウルトラマイクロトームで、比較的容易に電子顕微鏡の超薄切片を作製できるものです。展示のほかに、ラットのプレパラート標本で組織を観察できる体験コーナーも設けられました。



会場の様子

なお、同企画展に関連して特別講演会を開催しました。

10月4日(火)には、木山博資医学系研究科教授が「慢性ストレスが引き起こす細胞の過労死」と題し、最近明らかとなりつつある過労の分子レベルにおけるメカニズムについて講演しました。

10月28日(金)には、小林身哉金城学院大学教授が「顕微鏡組織図-画家がみた細胞の世界-」と題し、今回の企画展のメインである顕微鏡組織図について、とりわけ組織図の持つ力、描写の表現力について話をしました。

11月5日(土)には、臼倉治郎エコトピア科学研究所教授が「目で見る生命現象：最新の電顕技術が解き明かすミクロ(細胞)の世界」として、細胞膜下のアクチン線維網などの細胞骨格に関する最新の知見を話しました。

11月19日(土)には、蛭薙観順博物館准教授が「電子顕微鏡で観る楽しみ」と題して、反射電子走査型電顕を使った野鳥の羽の色素の観察等を紹介しました。

さらに、展示場でのギャラリートークを、10月3日(月)には博物館友の会会員の方を対象として、10月15日(土)にはホームカミングデイの一般市民対象行事として実施しました。

会期中には、「ミクロの探検隊 電子顕微鏡を使ってみよう」も3回開催し、それぞれ20名の定員を超える一般からの申し込みがあり、好評を博しました。

ICCAE 2011年度第7回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演するオニャンゴ学部長

農学国際教育協力研究センターは、12月7日(水)、2011年度第7回オープンセミナーを開催しました。

講演者のジョン・オニャンゴ マセノ大学理学部長は、日本学術振興会外国人招へい研究者として本学で研究をしています。オニャンゴ学部長は作物生理学、特に、ストレス生理学を専門にしており、同セミナーでは、アジアイネとアフリカイネの種間交雑によって育成されてきたネリカ米に関して話しました。ネリカ米は、アフリカ・サブサハラ地域における食糧生産や換金作物として重要な役割を果たすことが期待されています。

マセノ大学と本学との2006年以來の共同研究により、ネリカ米の生産性及び乾燥ストレスを始めとするストレス適応性のメカニズムが次第に明らかになってきており、これらの研究結果を紹介しつつ、今後のアフリカにおけるイネ生産の展望について議論を展開しました。

ICCAE 2011年度第8回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター



講演するオニャンゴ教授

農学国際教育協力研究センターは、12月13日(火)、2011年度第8回オープンセミナーを開催しました。

講演者のメアリー・オニャンゴ ジョモ・ケニヤッタ農工大学農学部教授は、栽培学、種子生理学、植物生理・栄養学を専門とし、最近では、低利用在来野菜と果物の再評価に関する研究を精力的に進めています。今回は、ケニアで実施した研究成果をもとに、低利用在来野菜と果物の潜在的価値を再評価することで、アフリカの食料安全保障と持続的発展に貢献する試みについて紹介しました。

アフリカでは、これまで野生から採取したり家庭菜園で栽培されていた在来果物や野菜をよく食してきましたが、海外から輸入される食品が広まるにつれて、その利用が急減しています。オニャンゴ教授の研究は、在来野菜と果物の利用を促すことで、アフリカにおける栄養不足や不安定な食料供給の改善を目指すものです。

受賞者一覧

褒章関係

受章日	受章名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23.11. 3	文化勲章	特別教授	赤崎 勇	
H23.11. 3	瑞宝重光章	特別教授	杉浦 昌弘	
H23.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	植下 協	
H23.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	島田 静雄	
H23.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	伊藤 憲昭	
H23.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	保原 充	
H23.11. 3	瑞宝中綬章	名誉教授	沖 猛雄	
H23.11. 3	瑞宝単光章	元医学部附属病院看護部 副看護部長	鈴木三栄子	
H23.11. 3	瑞宝単光章	元財務部経理・資産管理課 調理師	島立 清志	

教員

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23. 3.30	資源・素材学会 論文賞	大学院工学研究科教授	興戸 正純	市野 良一（エコトピア科学研究所教授） と連名
H23. 7.31	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員 （書面担当）の表彰	大学院工学研究科教授	上垣外正己	
H23. 7.31	日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員 （書面担当）の表彰	大学院工学研究科助教	片桐 清文	
H23. 8. 9	American Geophysical Union Editor's Citation for Excellence in Refereeing	大学院環境学研究科教授	鷺谷 威	
H23. 9.13	日本化学会 第5回バイオ関連化学シンポジウム講演賞	大学院工学研究科講師	檜田 啓	
H23. 9.14	電子情報通信学会 通信ソサイエティ活動功労賞	エコトピア科学研究所 准教授	岡田 啓	
H23. 9.15	化学工学会 化学工学会研究賞	大学院工学研究科教授	入谷 英司	
H23. 9.15	日本応用数理学会 論文賞（応用部門）	大学院工学研究科教授	張 紹良	
H23. 9.15	計測自動制御学会 論文賞武田賞	大学院工学研究科准教授	坂本 登	
H23. 9.21	IGCP 596会議「中生代における気候変動と 生物多様性パターン」 最優秀講演賞	博物館准教授	束田 和弘	他1名と連名
H23. 9.21	IGCP 596会議「中生代における気候変動と 生物多様性パターン」最優秀ポスター講演賞	博物館准教授	束田 和弘	
H23. 9.22	産学官連携功労者表彰 科学技術政策担当大臣賞	大学院工学研究科教授	堀 勝	西澤典彦（大学院工学研究科准教授）、 後藤俊夫（名誉教授）と連名
H23. 9.22	4th Asia Pacific Heart Rhythm Society Scientific Session 1st prize winner of Young Investigator Award/Basic	環境医学研究所研究員	山崎 正俊	
H23. 9.24	第84回日本生化学会大会 鈴木紘一メモリアル賞	生物機能開発利用研究センター 研究機関研究員	ガレノ エステル	
H23. 9.29	高分子学会旭化成賞	エコトピア科学研究所助教	森田 成昭	他2名と連名
H23. 9.29	日本母性衛生学会 平成23年度学術論文優秀賞	大学院医学系研究科准教授	田辺 圭子	玉腰浩司（大学院医学系研究科教授） 他1名と連名
H23.10. 5	IROS Harashima Award for Innovative Technologies	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H23.10. 9	日本機械学会 計算力学部門賞 業績賞	大学院工学研究科教授	松本 敏郎	
H23.10.17	2011堀場雅夫賞（第8回）	大学院工学研究科准教授	渡慶次 学	
H23.10.17	日本保健物理学会 論文賞	大学院工学研究科助教	平尾 茂一	山澤弘実（大学院工学研究科教授）、 森泉 純（大学院工学研究科准教授）と連名
H23.10.18	Whitehead Memorial Lecture Award IEEE DEIS 2011 CEIDP	大学院工学研究科教授	大久保 仁	
H23.10.22	第6回政治経済学・経済学会賞	大学院経済学研究科准教授	小堀 聡	
H23.10.22	日本機械学会 設計工学・システム部門 奨励業績表彰	大学院工学研究科助教	山田 崇恭	
H23.10.23	日本義肢装具学会 飯田賞本賞	エコトピア科学研究所 客員教授	元田 英一	
H23.10.23	公益社団法人土木学会 優秀論文賞	大学院環境学研究科教授	谷川 寛樹	
H23.10.24	日本惑星科学会 平成22年度最優秀研究者賞	大学院環境学研究科助教	諸田 智克	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・職名	受賞者	備考
H23.10.27	Charles J Overberger International Prize In Polymer Science Macromolecular Science and Engineering	特別招へい教授	岡本 佳男	
H23.10.31	16th World Congress of the International Society of Cryosurgery ISC Gold Medal	大学院医学系研究科教授	磯田 治夫	
H23.11. 3	第54回日経・経済図書文化賞	大学院経済学研究科准教授	小堀 聡	
H23.11. 4	谷川熱技術振興基金 粉生熱技術振興賞	大学院工学研究科教授	成瀬 一郎	
H23.11.11	第25回日本 IBM 科学賞	大学院工学研究科教授	大井 貴史	
H23.11.11	NIR Advance Award	エコトピア科学研究所助教	森田 成昭	
H23.11.14	応用物理学会 第31回(2011年秋季) 応用物理学会講演奨励賞	大学院工学研究科助教	牧原 克典	
H23.11.16	日本航空宇宙学会 第43回流体力学講演会/ 航空宇宙数値シミュレーション技術 シンポジウム 2011 最優秀賞 流体力学部門	大学院工学研究科教授	佐宗 章弘	山下聖主(大学院工学研究科 M2) と連名
H23.11.17	電子スピサイエンス学会 平成23年度電子 スピサイエンス学会奨励賞	大学院工学研究科助教	田中 久暁	
H23.11.18	第11回(平成23年度)山崎貞一賞 計測評価分野	名誉教授	中西 彊	竹田美和(大学院工学研究科教授) と連名
H23.11.22	日本甲状腺学会基礎医学研究奨励賞	環境医学研究所准教授	林 良敬	
H23.11.24	渋沢・クロードル賞	教養教育院特任准教授	ポーメール ニコラ アンドレー	
H23.11.26	バイオメカニズム学会 論文賞	エコトピア科学研究所 客員准教授	長谷 和徳	大日方五郎(エコトピア科学研究所教授) 他 1名と連名
H23.11.26	Banyu Chemist Award-BCA 2011- Banyu Life Science Foundation International	大学院工学研究科講師	波多野 学	
H23.11.26	2011年度日本活断層学会論文賞	大学院環境学研究科教授	鈴木 康弘	松多 信尚(大学院環境学研究科研究員)、 杉戸 信彦(大学院環境学研究科研究員)、 石黒 聡士(災害対策室研究員) と連名

学生

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23. 6.29	17th IEEE International Conference on Dielectric Liquids Best Student Paper Award	大学院工学研究科 M2	齊藤 輝	
H23. 8.26	The best presentation in session of Environmental System, JAPAN SOCIETY OF CIVIL ENGINEERS 13th International Summer Symposium	大学院環境学研究科 D3	王 運静	
H23. 8.31	第30回分析化学中部夏期セミナー 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M1	大久保勝貴	朱 沁(大学院工学研究科 M2) 梅村知也(エコトピア科学研究所准教授) と連名
H23. 8.31	Polymer Chemistry Poster Prize at the ACS National Meeting & Exposition	大学院工学研究科 D2	青嶋 紘	
H23. 9. 1	7th International Conference on Si Epitaxy and Heterostructures Best student paper award	大学院工学研究科 M2	中村菜里香	
H23. 9. 2	The 49th European High Pressure Research Group Conference Best Poster Award	大学院工学研究科 M1	堀部 太嗣	
H23. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	石塚 健太	
H23. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	佐野 誠実	
H23. 9. 3	高分子学会 東海支部 東海高分子研究会 学生研究奨励賞	大学院工学研究科 M2	牧口 航	
H23. 9. 3	IEEE EMBS Japan Chapter Young Researcher Award	大学院工学研究科 D3	高橋 弘武	
H23. 9. 8	日本セラミックス協会 第24回秋季シンポジウム特定セッション 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D2	朴 南姫	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23. 9. 8	日本セラミックス協会 第24回秋季シンポジウム特定セッション 優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D2	ユリア エカ ブトリ	
H23. 9. 8	JAIMA Poster Presentation Award 2011	大学院工学研究科 D3	安井 隆雄	馬場 嘉信 (大学院工学研究科教授)、 渡慶次 学 (大学院工学研究科准教授)、 岡本 行広 (大学院工学研究科特任講師) と連名
H23. 9. 9	日本セラミックス協会 第24回秋季シンポジウム 優秀発表賞	大学院工学研究科 D3	横井 太史	
H23. 9.10	日本鉱物科学会 2011年年会ポスター研究発表最優秀賞	大学院環境学研究科 D2	瀧瀬 佑衣	
H23. 9.11	生体機能関連化学部会 第26回若手フォーラム 優秀賞	大学院工学研究科 D3	藤井 大雅	
H23. 9.11	日本地質学会第118年学術大会 優秀ポスター賞	大学院環境学研究科 D2	森 宏	ウォリス サイモン (大学院環境学研究科 教授) と連名
H23. 9.12	日本液晶学会 2011日本液晶学会討論会 虹彩賞	大学院工学研究科 M2	佐野 誠実	
H23. 9.14	化学工学会 バイオ部会 平成23年度バイオ部会学生ポスター発表会 バイオ部会優秀ポスター賞	大学院工学研究科 M2	佐々木寛人	
H23. 9.16	第104回日本繁殖生物学会大会 優秀発表賞	大学院生命農学研究科 M1	笹川 佳倫	
H23. 9.16	土木学会地球環境委員会 平成23年度地球環境論文賞	大学院環境学研究科 D3	山口 工	竹内恒夫 (大学院環境学研究科教授) と 連名
H23. 9.16	土木学会地球環境委員会 平成23年度地球環境優秀講演賞	大学院環境学研究科 M2	山本 充洋	加藤博和 (大学院環境学研究科准教授)、 伊藤 圭 (大学院環境学研究科 D1) と 連名
H23. 9.16	2011年度日本地球化学会年会 学生優秀発表賞 (口頭発表)	大学院環境学研究科 D2	菅原 春菜	
H23. 9.18	日本環境共生学会 第14回研究発表大会学生発表賞	大学院環境学研究科 D1	伊藤 圭	
H23. 9.18	日本環境共生学会 第14回研究発表大会学生発表賞	大学院環境学研究科 D1	三室 碧人	
H23. 9.22	第21回植物微生物研究交流会 学生優秀発表賞	大学院生命農学研究科 D3	間瀬 圭介	
H23. 9.23	基礎有機化学会 第22回基礎有機化学討論会 ポスター賞	大学院工学研究科 M2	林 陽介	
H23. 9.24	第84回日本生化学会大会 鈴木紘一メモリアル賞	大学院生命農学研究科 M2	小林 隆史	
H23. 9.27	資源・素材学会 若手ポスター賞	大学院工学研究科 M2	青木 淑恵	ブラテスク マリア アントアネッタ (エコトピア科学研究所 特任教授)、 上野智永 (グリーンモビリティ連携研究 センター助教)、 是津信行 (グリーンモビリティ連携研究 センター准教授)、 齋藤永宏 (グリーンモビリティ連携研究 センター教授) と連名
H23. 9.30	環境アセスメント学会 第10回大会優秀ポスター賞	大学院工学研究科 D2	太田 貴大	
H23.10. 1	化学工学会 粒子・流体プロセス部会 化学工学会第43回秋季大会 シンポジウム賞 (プレゼンテーション賞)	大学院工学研究科 M2	羽根田晃一	
H23.10. 4	軽金属学会創立60周年記念東海支部ポスター 講演会優秀ポスター発表賞	大学院工学研究科 D2	山本 大	
H23.10. 8	日本混相流学会 日本混相流学会年会講演会 2011 学生優秀講演賞	大学院工学研究科 M2	羽根田晃一	
H23.10.14	近畿化学協会有機金属部会 第58回有機金属化学討論会 ポスター賞	大学院工学研究科 M2	中村 翔一	
H23.10.14	触媒学会西日本支部 第21回触媒学会キャラクターゼーション講習会 優秀研究発表賞	大学院工学研究科 D3	湯沢 勇人	吉田寿雄 (大学院工学研究科准教授) と 連名
H23.10.21	The 10th Northeast Asia Management and Economics Joint Conference (NAMEJC 2011) Distinguished Paper Award	大学院経済学研究科 D3	酒井 愛	

受賞者一覧

受賞日	受賞名	受賞者の所属・学年	受賞者	備考
H23.10.22	糖鎖科学名古屋拠点第9回若手の力フォーラム 奨励賞	大学院生命農学研究科 M2	住田 瑞季	
H23.11. 2	Excellent Research Presentation 3rd Place Advanced Technology and Applications 2011	大学院工学研究科 D2	沈 慶春	
H23.11. 2	Excellent Research Presentation 1st Place Advanced Technology and Applications 2011	大学院工学研究科 M2	石田 純一	
H23.11. 4	Young Sonochemist Award of Japan Society of Sonochemistry International Workshop on Advanced Sonochemistry	大学院工学研究科 M1	高柳 早希	
H23.11. 5	薄膜材料デバイス研究会 第8回研究集会 ベストペーパーアワード	大学院工学研究科 M2	水野 拓	太田裕道（大学院工学研究科准教授）他 7名と連名
H23.11. 9	Young Researcher Award The Organizing Committee of the Joint Seminar JSPS-CNRS	大学院工学研究科 D2	ユリア エカ ブトリ	
H23.11.12	「分析中部・ゆめ21」若手交流会 第11回高山フォーラム 最優秀発表賞	大学院工学研究科 M1	鈴木 俊貴	
H23.11.12	衛星設計コンテスト実行委員会 第19回衛星設計コンテスト設計大賞	大学院工学研究科 M1	岡原 卓矢	中島博文（大学院工学研究科 M1）、 齊川秀司（大学院工学研究科 M1）、 鈴木秀明（大学院工学研究科 M1）、 鴨志田和彦（工学部 B4）、 坂本拓史（工学部 B4）、 藤井健太（工学部 B4）、 食野吉史（工学部 B4）と連名
H23.11.14	応用物理学会 第31回（2011年秋季）応用物理学会講演 奨励賞	大学院工学研究科 D2	陳 尚	
H23.11.16	ACP2011-Asia Communications and Photonics Conference Best Student Paper Award	大学院工学研究科 M2	沈 志舒	
H23.11.19	計測自動制御学会 中部支部 第54回自動制御連合講演会 奨励賞	大学院工学研究科 M2	瀬川 正之	
H23.11.21	2011年度日本地震学会学生優秀発表賞	大学院環境学研究科 M2	江藤 周平	
H23.11.25	有機合成化学協会東海支部 第42回中部化学関係学協会支部連合秋季大会 有機化学一般研究発表 優秀賞	大学院工学研究科 M2	神谷 涉	
H23.11.26	名古屋大学若手女性研究者 サイエンスフォーラム総長賞	大学院工学研究科 M2	青木 淑恵	
H23.11.28	表面技術協会中部支部 平成23年度表面技術 協会若手研究者・技術者研究交流発表会 若手 奨励賞	大学院工学研究科 M2	苅和 慎平	寺島千晶（大学院工学研究科特任准教授）、 齋藤永宏（グリーンモビリティ連携研究 センター教授）、 高井 治（エコトピア科学研究所長）と 連名

* 受賞者の所属・職名又は学年は、受賞当時

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
1 豊國伸哉医学系研究科教授らは極小の炭素素材カーボンナノチューブの太さと発がん性との関連を解明	11.15 (火)	日経 (夕刊)
	11.24 (木)	日刊工業
2 本学は大学院に創薬科学研究科を新設すると発表する	11.16 (水)	朝日 (朝刊)
	11.25 (金)	読売 日刊工業
3 高橋 隆医学系研究科教授は肺腺がん遺伝子に転移を抑制する機能があることを発見した	11.16 (水)	毎日 (朝刊)
	11.22 (火)	中日 (朝刊) 日刊工業
4 現代日本誤百科 (526) : 「未来を変える」町田 健文学研究科教授	11.16 (水)	中日 (朝刊)
5 「不老会」創立50周年式典：濱口総長が献体を受ける5つの大学を代表して感謝の言葉を述べる	11.16 (水)	中日 (朝刊)
6 博物館「初めて描く博物画ーボタニカルアート体験ー」開催：12月14日、21日	11.16 (水)	中日 (夕刊)
	11.19 (土)	朝日 (朝刊)
7 情報科学研究科附属組込みシステム研究センターは宇宙航空研究開発機構 (JAXA) と「スペースワイヤ」の基本ソフト開発で覚書を締結し、同センター内にスペースソフトウェアプラットフォーム連携研究開発拠点を設置	11.17 (木)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
8 現代日本誤百科 (527):「存在意味」町田 健文学研究科教授	11.17 (木)	中日 (朝刊)
9 この人:医学部附属病院で国立大学初の「医療の質・安全管理部」専従教授に就任 長尾能雅医学部附属病院教授	11.17 (木)	中日 (朝刊)
10 防災心3・11と地震学:山岡耕春環境学研究科教授は「研究は何よりおもしろいと思えるかが大事。人のために役立つかは結果」と話す	11.17 (木)	朝日 (朝刊)
11 第6回 NAGOYA からのニッポン復活応援シンポジウム「非常時における地域医療のありかた」開催:29日 松田直之 医学系研究科教授	11.17 (木)	日経 (朝刊)
12 中部企業の課題 財務担当に聞く:アイシン精機株式会社専務取締役 三矢 誠氏本学卒業生	11.17 (木)	日経 (朝刊)
13 文部科学省は本学など5校を「リサーチ・アドミニストレーターを育成・確保するシステムの整備」事業の実施機関として採択	11.18 (金)	日刊工業
14 ベトナム人医師らがベトナム人を日本の病院で治療する可能性を探る目的で来日し医学部附属病院を視察	11.18 (金)	中日 (朝刊)
15 小林 誠本学特別教授が理事長を務める仁科記念財団は「仁科記念賞」の2011年受賞者を決定	11.18 (金)	日刊工業
16 本学と愛知県などは県や市が養成した防災リーダーを集めて12月10日に「防災人材交流セミナー」を開き人材の活用を図る	11.18 (金)	読売
17 瑞穂ふれあい区民講座「講演と健康づくりのひととき」開催:21日 黒田由彦環境学研究科教授が講演	11.18 (金) 11.19 (土)	毎日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
18 博物館特別講演会「電子顕微鏡で観る楽しみ」開催:19日 蛭薙観順博物館准教授が講演	11.18 (金)	中日 (朝刊)
19 名大カフェ “Science, and Me” 第17回「赤ちゃんの世界ー赤ちゃんはどのように見ている？」開催:12月7日	11.18 (金) 11.25 (金)	読売 毎日 (朝刊)
20 中部企業の課題 財務担当に聞く:中部電力株式会社代表取締役副社長執行役員 松原和弘氏本学卒業生	11.18 (金)	日経 (朝刊)
21 本学と海洋研究開発機構の研究チームは原子力発電所の事故を原因とする放射性物質の広がりは放出時刻で分布に差が生じることを解析した	11.18 (金)	日経 (夕刊)
22 本学が参加する国際共同研究グループが素粒子ニュートリノが光速より速く飛行することを再実験でも確認できたと発表	11.19 (土)	日経 (朝刊) 他2社
23 益川敏英本学特別教授は高エネルギー加速器研究機構が「KEKB 加速器」をより高性能に改造し測定を行う国際実験チームを発足させたことについて「こういう実験の重要性はますます高まるだろう」と話す	11.19 (土)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
24 メルコ学術振興財団設立5周年記念国際シンポジウムが野依記念学術交流館で12月2日、3日に開催される	11.19 (土)	中日 (朝刊)
25 減災連携研究センターの初代センター長に福和伸夫環境学研究科教授	11.19 (土)	読売 中日 (朝刊)
26 吉村正和本学名誉教授はフリーメイソンについて「とくに日本では自律的・自発的な市民の結社の伝統がほとんどないためフリーメイソンのような団体を理解するのは難しい」と語る	11.20 (日)	朝日 (朝刊)
27 生源寺眞一生命農学研究科教授「政府が農業のあり方をどうすべきか国民にしっかり提起していく必要がある」と語る	11.20 (日)	読売
28 深読み先読み:山田基成経済学研究科准教授は東海の自動車産業について「蓄積された技術を生かし、海外進出の可能性を」と語る	11.20 (日)	朝日 (朝刊)
29 平成23年度医学教育等関係業務功労者文部科学大臣表彰 (大学病院関係):佐上秋美医学部附属病院看護師	11.20 (日) 11.22 (火)	読売 中日 (朝刊)
30 医療・介護・福祉の就職・転職フェア開催:23日 杉浦伸一医学系研究科寄附講座准教授が講師を務める	11.20 (日)	中日 (朝刊)
31 第64回全日本合唱コンクール全国大会:混声合唱団名古屋大学コール・グランツェが金賞を受賞	11.20 (日)	朝日 (朝刊)
32 故飯田汲事本学名誉教授の昭和東南海地震や三河地震の被害調査は犠牲者や倒壊を正確に調査していたことが裏付けられた	11.21 (月)	中日 (朝刊)
33 現代日本誤百科 (528):「雪辱を晴らす」町田 健文学研究科教授	11.21 (月)	中日 (朝刊)
34 防災・日本再生シンポジウム「東海3県の国立大学が社会に向けて提案する巨大地震対策」で水谷法美工学研究科教授は「施設の点検をし、弱点があれば対応を」と語る	11.21 (月)	読売
35 学校と私:「精神の根底には戦争体験があると思います」赤崎 勇本学特別教授	11.21 (月)	毎日 (朝刊)
36 東海自治体問題研究所の連続講座「東日本大震災、東海地震、水害、自然エネルギーを考える」:木股文昭環境学研究科教授が講演	11.21 (月)	中日 (朝刊)
37 この人に聞きたい:NPO 法人日本医療コンシェルジュ研究所事務局長 二宮 香氏 (元医学系研究科教授秘書)	11.21 (月)	毎日 (朝刊)
38 現代日本誤百科 (529):「小ざれいな女性」町田 健文学研究科教授	11.22 (火)	中日 (朝刊)
39 第11回山崎貞一賞 (計測評価分野) 受賞:中西 疆本学名誉教授、竹田美和工学研究科教授	11.22 (火)	日刊工業
40 数理ウェブ開催:26日「ブローアップとブローダウン」大沢健夫多元数理学研究科教授	11.22 (火)	中日 (朝刊)
41 女子中高生理系進学セミナー開催:26日「音を感じる脳の理解に向けてー研究とライブイベントとの両立ー」上川 内あづさ理学研究科教授	11.22 (火)	中日 (朝刊)
42 教えて!ドクター:加藤景介氏本学卒業生	11.22 (火)	中日 (朝刊)
43 中部企業の課題 財務担当に聞く:ユニ株式会社常務取締役常務執行役員 越田次郎氏本学卒業生	11.22 (火)	日経 (朝刊)
44 安益公一郎生物機能開発利用研究センター特任助教らの研究グループは植物ホルモン「ジベレリン」が出現する過程を解明	11.23 (水) 11.24 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業 朝日 (朝刊)
45 本学が参加する国際共同研究グループのニュートリノの「超光速」を別の研究グループが否定	11.23 (水)	朝日 (朝刊) 他3社 読売
46 現代日本誤百科 (530):近くに「樹木が見受けられる」町田 健文学研究科教授	11.23 (水)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
47 講演会「東日本大震災と歴史に学ぶ災害対策」開催：福和伸夫環境学研究所教授が講演	11.23 (水)	中日 (朝刊)
48 西島謙一工学研究科助教の研究が財団法人中部科学技術センター2011年度学術奨励研究助成事業として採択される	11.23 (水)	中日 (朝刊)
49 本学は2012年度の学生募集要項を発表	11.23 (水)	中日 (朝刊)
50 中部企業の課題 財務担当に聞く：株式会社デンソー常務役員 臼井定広氏本学卒業生	11.23 (水)	日経 (朝刊)
51 現代日本誤百科 (531)：「急ぎよ引退に決めた」町田 健文学研究科教授	11.24 (木)	中日 (朝刊)
52 レーザー：中西 疆本学名誉教授は市場や企業の規模で研究開発の投資が左右される現況について「小さい売り上げでも儲けが出る仕組みが必要では」と語る	11.24 (木)	日刊工業
53 ニュースな人：常識覆す「光より速い粒子」を発表 小松雅宏教養教育院准教授	11.24 (木)	日経 (夕刊)
54 博物館企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』」開催：12月6日～2012年2月29日 特別講演会「創基140周年を迎えて一名古屋大学の源流をたどる」濱口総長が講演：12月7日	11.24 (木) 12.5 (月) 12.12 (月)	中日 (夕刊)
55 南米チリで国立天文台名誉教授石黒正人氏本学卒業生らの国際的な電波望遠鏡計画がすすめられる	11.24 (木)	中日 (朝刊)
56 TPPの視点：参加の意義について丁寧の説明を 生源寺眞一生命農学研究科教授	11.26 (土)	日経 (朝刊)
57 本学と農業・食品産業技術総合研究機構野菜茶業研究所の研究グループは有機肥料を使ってイチゴとミツバを養液栽培する技術を実用化	11.26 (土)	朝日 (夕刊)
58 水野正明医学部附属病院准教授が助言・監修したご当地体操「にしん体操」が紹介される	11.26 (土)	朝日 (夕刊)
59 京都女子大学法学部開設記念フォーラム開催：5日平川宗信本学名誉教授が講演	11.26 (土)	読売
60 第4回おもしろ科学教室開催：1月9日 IB 電子情報館	11.26 (土)	朝日 (朝刊)
61 益川敏英本学特別教授が大垣北高校で「現代社会と科学」をテーマに講演	11.27 (日)	中日西濃版 (朝刊)
62 ISETS'11市民公開講座「環境とエネルギーに関する講演会」開催：11日	11.27 (土) 12.2 (金)	中日 (朝刊) 読売
63 現代日本誤百科 (532)：「試合をものにする気持ち」町田 健文学研究科教授	11.28 (月)	中日 (朝刊)
64 レーザー：1番しかダメ 竹田美和工学研究科教授	11.28 (月)	日刊工業
65 ビジネス人材育成センター第4回シンポジウム「ポストドクター・インターンシップ推進事業」開催：12月1日	11.28 (月)	日刊工業
66 本学が主催する「日本数学コンクール」の入賞者の喜びの声が紹介される	11.28 (月)	中日 (朝刊)
67 奥村隆平経済学研究科教授は金城学院大学長に選任される	11.29 (火)	朝日 (朝刊) 他3社
68 医人伝：難治性てんかんの内科治療 夏目 淳医学系研究科准教授	11.29 (火)	中日 (朝刊)
69 濱口総長と高等研究院の特任助教ら5人は中川正春文部科学大臣を訪問し「博士を活かす国づくりに向けて」と題した提言をした	11.30 (水)	中日 (朝刊)
70 文部科学省の平成23年度「博士課程教育リーディングプログラム」21件が採択され、本学からは複合領域型(環境)として「グリーン自然科学国際教育研究プログラム」、オンリーワン型として「法制度と移植専門家養成」が採択される。	11.30 (水) 12.2 (金)	日経 (朝刊) 日刊工業
71 現代日本誤百科 (533)：「音色が聞こえる」町田 健文学研究科教授	11.30 (水)	中日 (朝刊)
72 第5回NAGOYAからのニッポン復活応援シンポジウム「サスティナブルな地域づくりと今後の復興計画②」開催：1日 古川忠稔環境学研究所准教授が講演	11.30 (水)	日経 (朝刊)
73 現代日本誤百科 (534)：「復興への青写真」町田 健文学研究科教授	12.1 (木)	中日 (朝刊)
74 今津孝次郎本学名誉教授は瑞浪中の女子中学生の自殺をめぐる訴訟の岐阜地裁の判決について「外面的ないじめ行為の有無という狭いとらえ方に逆戻りしている」と語る	12.1 (木)	中日 (朝刊)
75 防災心「揺れ」の怖さ：福和伸夫環境学研究所教授は長周期の地震波の様子を説明し「堆積平野の濃尾平野は長周期の地震波を増幅させやすい」と語る	12.1 (木)	朝日 (朝刊)
76 本学は豊田講堂を設計した建築家の横 文彦氏に名誉博士の称号を授与	12.1 (木)	読売
77 本学は松見 豊太陽地球環境研究所長の再任決定を発表	12.1 (木)	中日 (朝刊)
78 法学研究科にて滝田恭子氏読売新聞社科学部主任が宇宙開発をテーマに講義、40人が聴講	12.1 (木)	読売
79 濱口総長が選考委員を務める第25回中日産業技術賞の受賞技術・製品が決まる	12.1 (木)	中日 (朝刊)
80 東海教育特集：本学の産学連携が紹介される	12.1 (木)	日経 (朝刊)
81 教えて！ドクター：木村那智氏本学卒業生	12.1 (木)	中日ショッパー
82 有権者は今 河村減税の是非：大井友文さん本学文学部2年生	12.1 (木)	毎日 (夕刊)
83 上田 実医学系研究科教授らの研究グループは歯髄幹細胞が中枢神経の再生に効果があることを解明	12.2 (金)	中日 (朝刊) 他4社
84 山田陽滋工学研究科教授の「次世代産業用ロボットの安全ビジョンの研究」など10件が人工知能研究振興財団の産学官共同研究助成事業として選定される	12.2 (金)	日刊工業
85 脳とこころの研究センター主催オープンシンポジウム「一脳研究ー今治せること、これから治せること」開催：1月13日 祖父江 元医学系研究科教授が講演	12.2 (金) 12.9 (金)	毎日 (朝刊)
86 脱原発考：池内 了本学名誉教授 目標持ち節電続けて	12.3 (土)	中日 (朝刊)
87 医学部附属病院に來年度から「不育症」の相談窓口を設ける	12.3 (土)	読売 朝日 (朝刊)
88 名古屋大学交響楽団定期演奏会開催：4日	12.3 (土)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
89 名古屋大学英米文学会公開講座クリスマス・セミナー開催：9日	12. 3 (土)	中日 (朝刊)
90 石原篤幸氏本学卒業生は準絶滅危惧種の植物ミズアオイの種を希望者にわけている	12. 3 (土)	朝日 (朝刊)
91 野依良治本学特別教授ら4人に対する「名誉県民」の顕彰式が愛知県庁で行われる	12. 4 (日)	朝日 (朝刊) 他3社
92 スポットライト：氏原 環環境学研究所准教授は第1回親子で楽しむサイエンスカフェ&あいちサイエンスフェスティバル体験教室「化石を掘ってしらべよう」で24名の小中学生の指導にあたる	12. 4 (日)	中日 (朝刊)
93 わかるサイエンス：超光速ニュートリノ検証中 本学などの国際研究グループの実験結果について検証する	12. 4 (日)	読売
94 病院の実力 愛知編47：遺伝カウンセリング 医学部附属病院の実績が紹介される	12. 4 (日)	読売
95 現代日本誤百科 (535)：室内は「禁煙願います」町田 健文学研究科教授	12. 5 (月)	中日 (朝刊)
96 福井康雄理学研究科教授の研究室がチリ・アタカマ高地の標高4800メートル地点に建設した小型電波望遠鏡「NANTEN2」とりあげられる	12. 5 (月)	中日 (朝刊)
97 本学の研究グループが発明した技術を応用し愛知県産業技術研究所尾張繊維技術センターが支援し、竹田印刷と県が「水に浮く折り紙」を共同開発した	12. 5 (月) 12. 6 (火)	朝日 (朝刊) 読売
98 東海学生駅伝：本学が2位となる	12. 5 (月)	中日 (朝刊)
99 中世史研究会例会「享徳の乱と東海地方」開催：15日	12. 5 (月)	中日 (夕刊)
100 現代日本誤百科 (536)：兄の「無実を晴らす」町田 健文学研究科教授	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
101 耕論：格付けされる大学 評価には多様な視点必要 米澤彰純国際開発研究科准教授	12. 6 (火)	朝日 (朝刊)
102 本学を拠点に世界の物理学をリードした故坂田昌一博士の生誕100年にあたり3冊の本が刊行される	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
103 益川敏英本学特別教授は日本の子供の「理科ばなれ」に関して「今の試験や受験システムでは見て考える時間はムダだ、となる。つまらなくなるのも当然」と語る	12. 6 (火)	読売
104 本学で学んだ経験を持つ鈴木 孝氏が仏語詩コンクールで栄誉賞受賞	12. 6 (火)	中日 (朝刊)
105 椿 淳一郎工学研究科教授らの研究グループは放射能汚染土壌を大量に除染することができる処理システムを開発	12. 7 (水)	日刊工業
106 現代日本誤百科 (537)：自分たちが「楽しいというオーラ」町田 健文学研究科教授	12. 7 (水)	中日 (朝刊)
107 本学など名古屋市内の5大学は中部経済連合会の会員となる	12. 7 (水) 12. 9 (金)	日経 (朝刊) 毎日 (朝刊)
108 第11回遺伝子実験施設公開セミナー「食と健康とDNA」開催：9日	12. 7 (水)	中日 (朝刊)
109 高エネルギー加速器研究機構長の鈴木厚人氏は加速器の開発は「小林・益川理論」を実証した成果で研究に弾みがつき、国の技術をかかけた「国際競争」であると語る	12. 7 (水)	日刊工業
110 現代日本誤百科 (538)：「オリジナルで作った」カメラ 町田 健文学研究科教授	12. 8 (木)	中日 (朝刊)
111 防災心「揺れ」の怖さ：愛知県は本学、名古屋工業大学などと連携し愛知建築地震災害軽減システム研究協議会をつくり住宅の耐震改修を進めるため安くて効果のある41の工法を認定	12. 8 (木)	朝日 (朝刊)
112 大岡 豊さん本学大学院生が副代表を務めるチャリティー団体「+ ONE (プラスワン)」と中部国際空港などは東日本大震災からの復興を折って折鶴でつくったクリスマスツリーを仙台空港へ贈る	12. 8 (木)	日経 (朝刊)
113 伊丹健一郎理学研究科教授らの研究グループはクロスカップリング反応の新技术を開発	12. 9 (金)	中日 (朝刊) 読売
114 TPPと農業再生：生寺源真一生命農学研究科教授は競争力をつけるとともに海外との差を補う政策には財源の効果的投入が欠かせないと語る	12. 9 (金)	毎日 (朝刊)
115 博物館サテライト展示「野外観察園の四季」：5日～1月31日まで	12. 9 (金)	中日 (朝刊)
116 名古屋市博物館の学芸員木村慎平氏本学卒業生は「日露戦争と『軍神広瀬中佐』」をめぐる過熱報道について論じる	12. 9 (金)	中日 (朝刊)
117 第3回アカデミーサロンノーベル物理学賞益川敏英特別教授が贈る特別記念講座「CP対称性とは？」開催：27日	12.10 (土) 12.11 (日)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
118 「坂田昌一の生涯」などの著者である西谷 正氏本学卒業生は坂田昌一博士生誕100周年にあたり博士の科学者としての姿勢を回顧する	12.10 (土)	朝日 (夕刊)
119 本学内部被爆問題研究会主催「チェルノブイリ・ハート」上映講演会開催：17日	12.10 (土) 12.14 (水)	中日千種ホーム ニュース 毎日 (朝刊)
120 医学部附属病院で導入している医療用ロボットが取り上げられる	12.11 (日)	日経 (朝刊)
121 小松雅宏教養教育院准教授は超高速ニュートリノの真偽について「残る問題は両地点の時刻合わせの正確さと実験機器の電気信号の遅延の補正の正確性ほぼ2つに絞られる」と語る	12.11 (日)	日経 (朝刊)
122 普及するカンガルーケアについて有志の医師らによるグループがガイドラインを作成 医学部附属病院で起きたカンガルーケア中の事故が取り上げられる	12.13 (火)	中日 (朝刊)
123 菱川明栄理学研究科教授らの研究グループは短い波長で強い光を受けた物質の光吸収メカニズムを解明	12.13 (火)	日刊工業
124 現代日本誤百科 (539)：「かなり泥酔」している 町田 健文学研究科教授	12.13 (火)	中日 (朝刊)
125 本学など10大学200人が第33回名古屋国際関係合同ゼミナールで国際問題に関する研究を発表	12.13 (火)	中日 (朝刊)
126 田中靖郎本学特別教授など7名が新たに学士院会員に選任される	12.13 (火)	朝日 (朝刊) 他4紙
127 特定非営利活動法人愛知排泄ケア研究会主催ワークショップ「私の3・11～今居ること、これから、を考える～」開催：18日 医学部医系研究棟1号館	12.13 (火)	中日 (朝刊)
128 第18回 spcafé「穴あきコンクリートブロックの考現学」開催：13日	12.13 (火)	中日 (朝刊)
129 教えて！ドクター：浅田義正氏本学卒業生	12.13 (火)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年11月16日～12月15日]

記事	月日	新聞等名
130 現代日本誤百科 (540)：節電のために「消灯させてあります」町田 健文学研究科教授	12.14 (水)	中日 (朝刊)
131 伊藤正樹生命農学研究科准教授らのグループが「果実巨大化」の鍵となる遺伝子を発見	12.14 (水)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
132 本学はトヨタなどと共同で車載データ統合管理システムを開発するコンソーシアムを設立する	12.14 (水)	日刊工業
133 石原一彰工学研究科教授らの研究グループは有機化合物カルボン酸エステルを水の中で合成することに成功	12.15 (木)	中日 (朝刊)
134 現代日本誤百科 (541)：「甘さもあつつ」町田 健文学研究科教授	12.15 (木)	中日 (朝刊)
135 岡島徹也医学系研究科准教授らの研究グループは糖の一種であるN-アセチルグルコサミンに細胞と外側の物質を結び付ける役割があることを発見	12.15 (木)	中日 (朝刊)
136 笹部美知子理学研究科特任助教らは植物細胞分裂に際してCDKという酵素が調整役となっていることを発見	12.15 (木)	朝日 (朝刊)
137 林良嗣環境学研究科教授は第3回「中部の未来を考える会」にて「巨大地震に強い地域づくり」をテーマにしたパネルディスカッションでコーディネーターを務める	12.15 (木)	中日 (朝刊)
138 法学研究科にて読売新聞社編集委員の結城和香子氏が「世界のスポーツとアジア」のテーマで講義、留学生らが聴講	12.15 (木)	読売
139 鈴置保雄工学研究科長の再任決定を発表	12.15 (木)	朝日 (朝刊)
140 愛知県主催化学物質セミナー開催：1月26日 那須民江医学系研究科教授が講演	12.15 (木)	中日 (朝刊)
141 シンポジウム「フクシマ原発暴走は収束に向かっているか」開催：17日 沢田昭二本学名誉教授がパネリストとして出席	12.15 (木)	読売
142 博物館「現代の博物画ーボタニカルアート作品展」開催：6日～2月29日まで	12.15 (木)	中日 (朝刊)
143 博物館コンサート「ジャズでつづるクリスマス」開催：17日	12.15 (木)	中日 (朝刊)
144 教えて！ドクター：磯部和男氏元附属病院医師	12.15 (木)	中日ショッパー

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
12月5日(月)～1月31日(火) 場 所：野外観察園セミナーハウス 2階展示室 時 間：10:00～16:00 休 館 日：土・日・祝日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	サテライト展示「野外観察園の四季」
12月6日(火)～2月29日(水) 場 所：博物館展示室 時 間：10:00～16:00 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』 ー解剖学創始者のミュージアムー」 [特別講演会] 1月31日(火) 場 所：博物館講義室 時 間：13:30～15:30 講演題目：「医学とチョウ」 講 演 者：高橋 昭 (本学名誉教授) 講演題目：「奈良坂と愛知教育博物館」 講 演 者：加藤詔士氏 (愛知大学教授) 参 加 費：無料
12月6日(火)～2月29日(水) 場 所：博物館展示室 時 間：10:00～16:00 休 館 日：日・月曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	現代の博物画 ーボタニカルアート作品展



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月16日(月)～1月17日(火)

場 所：野依記念学術交流館
 時 間：10:00～17:30 (予定) (1/16)、
 10:00～16:30 (予定) (1/17)
 対 象：一般
 参 加 費：無料

第2回「太陽活動と気候変動の関係」に関する 名古屋ワークショップ

内 容：温暖化の原因に関して活発な論争が続いている太陽活動の気候影響について、気候学、太陽物理学、古気候学などに関する世界の最前線の研究者を招いて学際的な議論を行う。

[問い合わせ先]

太陽地球環境研究所
 教授 草野完也 052-747-6337

1月18日(水)

場 所：野依記念学術交流館
 時 間：10:00～17:30
 参 加 費：無料

文部科学省先端研究施設共用促進事業連携シンポジウム —復興と新生のための科学技術支援と産学官連携促進—

テ ー マ：「我が国の復興・新生に向けた科学技術支援と産学官連携促進」
 内 容：6大学(名古屋大学、京都大学、大阪大学、東京理科大学、東北大学、名古屋工業大学)による成果報告、講演、展示ブース
 講演題目：「科学技術イノベーション政策の展開と研究開発プラットフォームの形成について」
 講 演 者：柿田恭良氏(文部科学省研究振興局基盤研究課長)
 講演題目：「震災からの復興に向けて—長期展望に立った東北地区の問題と産学連携」
 講 演 者：庄子哲雄氏(東北大学卓越教授)

[問い合わせ先]

超高圧電子顕微鏡施設
 事務局 052-789-3632



1月19日(木)～1月20日(金)

場 所：野依記念学術交流館
 時 間：10:00～17:00 (1/19)
 9:30～16:30 (1/20)
 参 加 費：無料

文部科学省先端研究施設共用促進事業国際シンポジウム 産業界における電子顕微鏡の役割 —真の産学協同に向けて—

内 容：講演、ディスカッション、ポスターセッション

[問い合わせ先]

超高圧電子顕微鏡施設
 事務局 052-789-3632



1月24日(火)、2月27日(月)

第7回 (1/24)
 場 所：ウインクあいち18階セミナー室
 時 間：14:00～16:00
 第8回 (2/27)
 場 所：大府市勤労文化会館
 時 間：14:00～16:00 (予定)

環境学研究科しんきん環境事業 イノベーション寄附講座 第2シリーズ第7回、第8回講演会

第7回
 講演題目：「食料主権を支える種子(タネ)を守り繋ぐ人々とそのしくみ」
 講 演 者：西川芳昭(国際開発研究科教授)
 講演題目：「植物を用いた環境浄化」
 講 演 者：竹中千里(生命農学研究科教授)
 第8回
 講演題目：「『環境』の問題と人間の『行動』との関係(仮)」
 講 演 者：杉浦淳吉氏(愛知教育大学准教授)
 講演題目：「再生エネルギーの課題(仮)」
 講 演 者：安田公昭(環境学研究科寄附講座教授)

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

環境学研究科 052-747-6550

1月25日(水)

場 所：IB電子情報館南館1階
 IBカフェ
 時 間：18:00～19:30
 対 象：一般
 参 加 費：無料(会場にてドリンクの注文が必要)

第8回げんさいカフェ — Gen Science Café —

講演題目：「東日本大震災の謎を海岸工学から考える」
 講 演 者：水谷法美(工学研究科教授)

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月31日(火)

場 所：野依記念学術交流会館
時 間：13:30~17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

名古屋大学協会の会 第13回セミナー
第1回「知の拠点」重点研究プロジェクト若手セミナー

[問い合わせ先]
名古屋大学協会事務局 052-744-1987

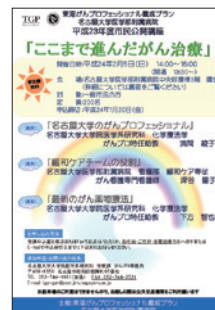
2月5日(日)

場 所：医学部附属病院中央診療棟3階
講堂
時 間：14:00~16:00
定 員：200名
対 象：一般
参 加 費：無料

東海がんプロフェッショナル養成プラン
医学部附属病院 平成23年度市民公開講座

テ ー マ：「ここまで進んだがん治療」
講演題目：「名古屋大学のがんプロフェッショナル」
講 演 者：満間綾子（医学系研究科特任助教）
講演題目：「緩和ケアチームの役割」
講 演 者：深谷陽子（医学部附属病院看護師）
講演題目：「最新のがん薬物療法」
講 演 者：下方智也（医学系研究科特任助教）

[問い合わせ先]
医学部・医学系研究科
事務部学務課 052-744-1981



2月11日(土)

場 所：博物館ピロティエー
時 間：13:00~16:00
定 員：20名
対 象：小学校高学年以上、一般
参 加 費：50円（保険料）

博物館体験ワークショップ

テ ー マ：「顕微鏡で見る石器」

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767



2月15日(水)

場 所：日本経済新聞社名古屋支社
3階会議室（名古屋市中区）
時 間：18:00~19:30

第14回名古屋ビジネスセミナー

講演題目：「最近の財政・金融情勢について」
講 演 者：池田篤彦氏（東海財務局長）

[問い合わせ先]
経済学研究科
附属国際経済政策研究センター
052-789-4945

2月18日(土)

場 所：博物館展示室
時 間：14:00~
参 加 費：無料

博物館コンサート

「早春の音楽会」

演奏曲目：「弦楽四重奏曲第10番 op. 74『ハーブ』より」ベートーヴェン、
「アヴェ・マリア」シューベルト、
「弦楽四重奏のための4つの小品 op. 81より」メンデルスゾーン、
「ジョン・カム・キス」バード、他

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

名大トピックス No.224 平成24年1月16日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

医学部附属病院外来診療棟
(平成23年12月2日)



117 明治天皇に拝謁した外国人教師ローレツ

ローレツといえば、ウィーン大学を卒業後来日し、1876(明治9)年から80年にかけての4年間、いわゆるお雇い外国人として、名大医学部の前身の医学校・病院で先進的な教育や医療を確立するなど、大きな足跡を残した人物として知られています。今回は、そのローレツが25歳の若き明治天皇に拝謁したというエピソードです。

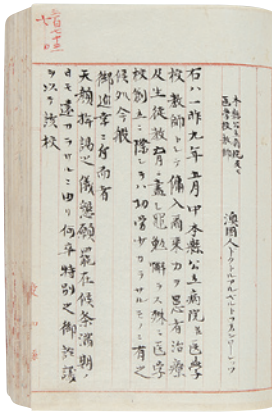
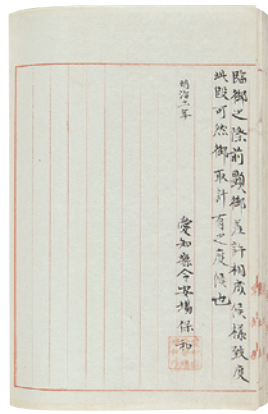
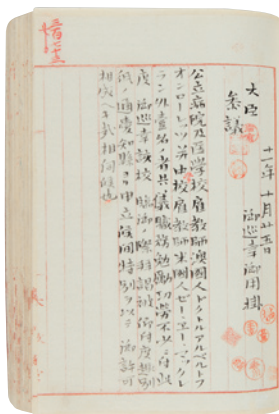
明治初期、明治天皇は地方巡幸を積極的におこなわれました。1872(明治5)年5～7月の西国巡幸、1876年6～7月の東北・北海道巡幸、そして1878年8～11月の北陸・東海巡幸などです。西南戦争のために1年延期されたこの北陸・東海地方を中心とする巡幸は、1府12県を72日間ですまわった大規模なものでした。

明治天皇が愛知県公立医学校(公立病院)を訪れたのは、1878(明治11)年10月26日のことです。この日の天皇は、朝早くに宿所を出発、県庁を訪問したのち県令(のちの県知事)の先導で医学校・病院に向かいました。校長や

ローレツをはじめとする教員、学生たちが門側に並んでこれを出迎えています。

これに先立って、県令から御巡幸御用掛に対し、ローレツが強く希望しているのも、これまでの功労を考慮して、天皇との拝謁を特別に許可してほしいとの願いが提出されます(写真2)、医学校訪問の前日にその旨の伺いがなされます(写真3)。当時の新聞には、実際に拝謁がなされたとの記事を見ることができます。天皇は医学校の授業も観覧しました。

明治天皇は、各地を巡幸する際、近代的な施設を必ず視察しました。その目的の1つは、天皇が近代化政策を推進していることを国民に強く印象づけるためです。公立医学校を訪れたのも、その一環といえます。日本人の西洋医学に対する抵抗感は、まだ根強いものがありました。天皇の訪問は、これを払拭していく効果があったものと考えられます。



3	2	1
4	5	

- 写真2～3が綴じられている「公文録」の表紙。公文録(こうぶんろく)は、明治元年から18年にかけて太政官が授受した公文書をまとめたもので、国立公文書館に所蔵され、国の重要文化財になっている。
- 「天顔拝謁の儀、懇願まかりあり候条、満期の日も遠からざるにより、何とぞ特別の御詮議を以て…」とあるように、当初は翌年4月までの雇用契約であったが、のちに1年間延長された。
- 右上に右大臣岩倉具視の印が見える。岩倉もこの巡幸に随行していた。



- アルブレヒト・フォン・ローレツ(Albrecht von Roretz, 1846-1884、写真は山形市郷土館所蔵)。明治天皇と拝謁した時は31歳。愛知県を去ったのちは、山形県などで西洋医学の普及に尽くした。
- 天王崎(現在の名古屋市中区1丁目、(株)トーエネック本社のあたり)の医学校校舎。天皇が訪れた時、前年の1877(明治10)年に新築移転したばかりであった。